

せに ぼたけ い せき
銭 畑 遺 跡 I

事務所兼倉庫建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3

石川県小松市教育委員会
南征建設運輸株式会社



銭畑遺跡遠景



銭畑遺跡全景



6号溝出土の木椀



6号溝出土の漆器椀



6号溝出土の漆器椀



11号土坑の井戸枠



10号溝出土の曲物底板



10号土坑出土の横櫛

例 言

1. 本書は南征建設運輸株式会社の事務所建設に伴って、平成3年度に実施した銭畑遺跡（ぜにばたけいせき）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品整理は南征建設運輸株式会社の依頼を受け、小松市教育委員会が主体となり実施した。なお、事業費は全額、事業者である南征建設運輸株式会社が出費した。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりである。
 - 《調査地》 小松市御館町（おたちまち）甲70、71、72-1、73-1番地
 - 《調査面積》 発掘調査対象約600㎡、試掘調査対象2,100㎡
 - 《調査期間》 平成3年6月5日～8月12日
 - 《担当者》 小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 望月精司
4. 出土品整理及び報告書作成は小松市教育委員会埋蔵文化財調査室望月・宮下幸夫が担当し、埋蔵文化財調査室臨時職員打田外喜代、江野直子、国本久美子、山口美子の協力を得た。
なお、出土品の整理作業にあたっては、伊藤節子、林真輝の両名を雇用し、これに従事した。
5. 写真撮影は遺構を望月が、遺物を宮下が主に担当した。
6. 本書の執筆は以下のように分担し、編集は、望月と宮下があたった。
 - 第1～3章、第4章第1・2節・第3節の第1項……………望月
 - 第4章第3節の第2項……………宮下
7. 本書で示す方位は全て磁北である。なお、第1図遺跡の位置には国土地理院発行50,000分の1地形図（昭和58年発行「小松」）を、第2図周辺の遺跡分布には国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」「美川」）を、第3図御館町の遺跡分布と各調査区域には小松市発行2,500分の1国土基本図を使用した。
8. 本調査において出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図、写真等の資料は小松市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体から御協力・御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい（敬称略）。
上野与一、宇野隆夫、垣内光次郎、加納他家男、北野勝次、北野博司、橋本澄夫、
浜岡賢太郎、平口哲夫、藤田邦雄、本多義和、有川測量設計事務所、石川県立埋蔵文化財センター

目 次

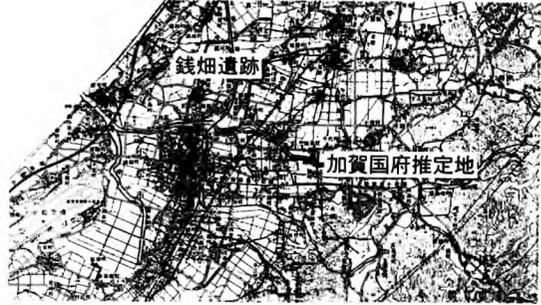
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	4
第1節 調査に至るまでの経緯	4
第2節 発掘調査経過の概要	4
第3章 遺跡周辺の調査成果と本調査の概要	6
第1節 御館町の既往の調査と遺跡の分布	6
第2節 本調査の概要	7
第1項 発掘調査区域	7
第2項 現状保存区域	8
第4章 発見された遺構と遺物	12
第1節 弥生時代の遺構と遺物	12
第1項 遺 構	12
第2項 遺 物	12
第2節 古墳時代～平安時代の遺構と遺物	15
第1項 遺 構	15
第2項 遺 物	16
第3節 中世の遺構と遺物	18
第1項 遺 構	18
第2項 遺 物	24
別表 土器観察表	41
写真図版	1～18

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は小松市街地の北部、市道国道長崎線の沿線上、御館町周辺に位置し、梯川の中流域、支流の八丁川合流点近くに立地する。

さて、梯川は源流を大杉谷川と言い、大日山連峰である鎗ヶ岳に端を発して北流し、金野町で郷谷川と合流して梯川となる。山間部ではV字谷を開析し、明瞭な河岸段丘を形成するが、軽海町で滓上川と合流した以後は、流れを西に変えて、流速を急激に落とし、北東方向から流れる来る鍋谷川、八丁川の支流と合流しながら、蛇行して日本海に注ぐ。滓上川と合流した以後の中・下流域では泥土の堆積が著しく、低湿な沖積平野を形成し、右岸では手取川扇状地の南縁と接して広大な平野を形成している。この平野は農用適地として穀倉地帯を形成しているが、一方では河川の氾濫による被害も大きく、そのために、当地域には砂層や泥土の厚い堆積がある。



第1図 遺跡の位置 (S = 1/200,000)

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺に立地する遺跡は縄文時代に逆上るものも存在するが（一針遺跡）、弥生時代以降遺跡の数が急増する。遺跡としては梯川右岸で高堂遺跡、松梨遺跡の他、当遺跡でも弥生時代中期の土坑が1基検出されている。梯川左岸では梯川鉄橋遺跡、平面梯川遺跡、白江梯川遺跡、白江念仏寺塔遺跡、漆町遺跡など数多く存在し、これは梯川の水利と低湿な土壌が農耕に適していたために、水田経営の浸透する弥生時代以降に当地への集落進出が活発となったものと言える。弥生時代以降、遺跡の数は増加しないが、同所において遺跡が断続的に営まれ、中世に至るまでの複合集落遺跡が数多く存在する。特に、加賀国府が置かれる9世紀後半（加賀国の立国は9世紀前半であるが、国府が能美郡に置かれるのは9世紀後半とする説が有力視されている）では、推定地とされている古府町を中心として、佐々木町、漆町、白江町に大規模な集落遺跡が営まれ、一般集落では出土しない政治的色彩の濃い遺物が目立つ。

本遺跡の中心的な時代である鎌倉・室町時代は白江町、漆町、佐々木町などに分布する遺跡が継続して営まれる他、御館町を中心として新たに遺跡が出現する。御館町地内には、西堀、東堀、水流口、馬場、城門、門出、御庵等の小字名が伝えられており、御館町の南側には大門という名

番号	名 称	種 別	時 代	番号	名 称	種 別	時 代
1	銭畑遺跡	館 跡	弥生・平安・中世	14	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世
2	御館遺跡	館 跡	鎌倉・室町	15	佐々木遺跡	集落跡	平 安
3	松梨遺跡	集落跡	弥生～鎌倉	16	漆町遺跡	集落跡	縄文～中世
4	中之江遺跡	集落跡	古 墳	17	白江念仏寺塔遺跡	集落跡	弥生～中世
5	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	18	一針遺跡	包含地	縄 文
6	千代遺跡	集落跡	縄文～中世	19	定地坊跡	寺院跡	室 町
7	千代オオキダ遺跡	包含地	奈良～中世	20	白江堡跡	館 跡	室 町
8	小野町遺跡	包含地	古 墳	21	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世
9	千代城趾	城 跡	室 町	22	平面梯川遺跡	包含地	弥 生
10	古府フンド遺跡	集落跡	平 安	23	梯川鉄橋遺跡	包含地	弥 生
11	横地遺跡	包含地	縄 文	24	小松城跡	城 跡	江 戸
12	本村遺跡	包含地	古 墳	25	上小松遺跡	包含地	平 安
13	千代マエダ遺跡	包含地	古墳～平安				

第1表 遺跡地名表

称が伝えられている。当時、当地は板津荘に属し、12～13世紀頃、鎮守府將軍藤原利仁の末裔と称する林成景が石川郡より当地に来住・土着し、板津氏を名乗った。板津氏は後に得橋郷・能美荘にも領主経営を拡大し、地頭領主として成長、当地域の筆頭領主としての位置を確保した。御館の名称は、能美郡誌に「口碑に、往時一介の土ありて、宏大なる館を造り伽藍に摸す、彼れ、衆望ありしかば、世人呼びて御館と称す」とあり、有力者の居館があったことから付けられていることは明白で、これに該当するものとして先に述べた板津荘に居を構えたとする板津氏が最も有力である。また、一方では一向一揆の大将であった蛭川心七郎重親の居館跡であるとする説もあり、時代を違えて、当町が豪族等の居館として占地された可能性もある。さて、本遺跡の「銭畑遺跡」という名称は、江戸時代に鑄銭数百貫を掘り出したことよりつけられているが、この遺跡は広義では北側に分布する御館遺跡と同種のもので、御館町を中心とする広い範囲に分布する鎌倉・室町時代の遺跡の中にこのような豪族居館が存在していたものと予想する。

参考文献

- 田嶋明人他 1986 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
石川県能美郡役所 1923 『石川県能美郡誌』
浅香年木他編 1981 『角川日本地名辞典17 石川県』角川書店
若林喜三郎・高澤裕一編 1991 『日本歴史地名大系第17巻 石川県の地名』平凡社
浅香年木 1978 『古代地域史の研究－北陸の古代と中世Ⅰ－』法政大学出版局
樫田誠 1989 「北部地区の調査」『市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』小松市教育委員会

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至るまでの経緯

平成2年4月、小松市平面町所在の鳥居運送株式会社より小松営業所移転に伴う、御館町甲70、71、72-1、73-1番地における埋蔵文化財の協議が小松市教育委員会に提出された。当地は以前より、埋蔵文化財包蔵地の多く分布する区域として、小松市教育委員会としても注意していた区域であったので、試掘調査必要の旨を回答した。

平成2年5月17日、小松市教育委員会は鳥居運送株式会社より提出された申請地における試掘調査の依頼を受け、試掘調査を実施した。その結果、中世の遺物とともに溝の遺構を数条確認し、南に存在する銭畑遺跡が当地まで分布することを確認した。当地における開発計画は区域の南西側、約600㎡に事務所兼車庫の建物建設用地とし、周辺は簡易舗装工事による駐車場となっていたため、駐車場区域は盛土施工による仮設の工事の前提で、トレンチ調査による遺跡の広がりを確認する調査に止め、盛土による現状保存区域とし、建物の建設される区域のみを全面発掘調査の対象区域とした。

鳥居運送株式会社小松営業所の移転は、小松市平面町に進出する大型スーパーマーケットにより生じたもので、その用地買収・造成工事を南征建設運輸株式会社が担当していたことにより、代替地である御館町の用地買収・造成工事及びそれに伴う発掘調査は南征建設運輸株式会社が事業主体として行うこととなった。平成3年4月8日、南征建設運輸株式会社より文化庁への埋蔵文化財発掘の届出が提出され、4月10日、小松市教育委員会は文化庁へ埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。同年6月、南征建設運輸株式会社より小松市教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出され、これを受け、小松市教育委員会は6月5日より調査を開始する旨の回答をするとともに、発掘調査の実施及び出土品整理の一切を取り決めた「事務所建設に伴う銭畑遺跡発掘調査事業の実施に関する覚書」を南征建設運輸株式会社と交換し、発掘調査に着手した。

なお、当調査は調査の円滑化を図るため、委託事業という形は取らず、調査事務の一切を南征建設運輸株式会社の直営とし、小松市教育委員会が調査員を派遣するという形の調査・事務体制を取った。

第2節 発掘調査経過の概要

平成3年6月5日、全面調査区域の耕作表土の除去を重機械により実施し、遺物包含層まで掘り下げた。また、当地は湧水が激しく、排水を24時間行わないと水没してしまうため、調査区域周縁に排水溝を掘り、ポンプアップして排水の円滑を図った。

6月11日、調査区域内に5mメッシュのグリッド杭を打ち、北側から遺物包含層の掘り下げを開始する。6月13日、北側半分の包含層の掘り下げを完了し、遺構プラン確認を行う。東西とそれから南北に派生する大型の溝2条を検出し、1号・2号溝とする。また、小型の溝3条及び土坑数基を検出する。

6月14日、1・2号溝の掘り下げを開始する。当遺構は5～6mごとにセクションベルトを設け、A～Fに区割りして、各層位ごとに順次遺物を取り上げながら掘り下げた。なお、これに併行し、小型の3・4号溝、1～4号土坑もセクションベルトを残しながら掘り下げた。

6月19日、1・2号溝のセクション図作成を開始し、6月26日、セクション図作成を完了、ベルトを除去し、全景写真及び遺物出土状況の写真を撮影する。及び、3・4号溝、各土坑も同様にセクション図作成し、全景写真を撮影する。

6月28日、南側の遺物包含層を掘り下げ、遺構プランの確認作業を開始する。1号溝と併行して東西に伸びる大型の溝2条を検出し、5号溝と6号溝とする。また、1号・5号溝間に1基土坑（7号土坑）と小型溝1条（7号溝）、5号・6号溝間に土坑2基（5・6号土坑）を検出した。

7月9日、6号溝の掘り下げを開始し、1・2号溝同様6～7mごとに区割りして掘り下げた。また、この作業に併行して、1・2号溝の平面図と各土坑の平面図を作成した。同月15日、6号溝より漆器や曲物などの木製品を多量に出土する。及び、併行して、溝のセクション図を作成し、7月23日掘り下げを完了する。

7月24日、5号溝の掘り下げを6号溝と同様の方法で開始する。及び、6号溝の全景、遺物出土状況写真を撮影する。また、同月25日までに、5～7号土坑の半載を行い、セクション図作成し、全景写真、平面図作成を完了する。同月29日、5号溝のセクション図作成、掘り下げを完了する。30日、遺物の出土状況写真、全景写真を撮影する。31日、5・6号溝の平面図を作成し、全面発掘調査区域での作業をほぼ完了する。

7月31日、駐車場区域の調査を開始する。調査は市道国道長崎線沿いに東西のトレンチを1本（第Ⅰトレンチ）、市道梯・大島線沿いに南北のトレンチを1本（第Ⅱトレンチ）を設定し、現況面より人力で掘り下げた。

8月5日、第Ⅰ・Ⅱトレンチの確認調査を行い、溝3条（9～11号溝）と土坑7基（8～14号土坑）を検出し、各遺構を掘り下げ、8日掘り下げを完了した。

8月9日、各トレンチのセクション図・平面図を作成し、ラジコンヘリによる遺跡全体の全景写真を撮影する。

8月12日、各トレンチの埋め戻し作業を実施し、発掘調査作業を完了する。

これをもって、発掘調査業務は完了し、9月1日より出土品整理業務に取り掛かる。

第3章 遺跡周辺の調査成果と本調査の概要

第1節 御館町の既往調査と遺跡分布

第1章でも述べたとおり、御館町では南側で江戸時代に多量の銅銭が出土し（銭畑遺跡）、古くから遺跡が存在することはわかっていたが、最近まで調査を行ったことはなく、分布範囲やその内容については不明であった。しかし、北陸自動車道小松インターと国道8号線を結ぶ幹線道路市道国道長崎線の整備によって、沿線における開発計画が多発し、昭和62年御館町における初めての試掘調査がなされた。この結果、室町時代頃の集落遺跡（御館遺跡）が確認され、昭和63年5月23日～8月13日に発掘調査を実施、大溝3条、溝3条、土坑3基、井戸1基を検出した。遺物は14～15世紀頃の中世土師器の他、漆器等の木製品も出土しており、建物跡の検出はなかったが、近くに中世の居館跡の存在を予想させることを確認した。この状況を受け、小松市教育委員会では国庫補助事業として、当地域を対象とした試掘調査を実施した。対象地は市道沿線の地主の承諾の得られた4カ所（A～D地点）であったが、遺物の密に分布するのは昭和63年度に調査した御館遺跡の南側（C地点）のみで、他では遺物が少量分布する程度であった。その後、平成2年度銭畑遺跡の北側に位置する区域の分布調査を実施し（E地点）、当地まで銭畑遺跡が広がることを確認した。



第3図 御館町の遺跡分布と各調査区域

以上の分布調査により、遺跡の広がりや想定すれば、御館遺跡はC地点付近を南限としてそれより北側に広がるものと推定でき、現在の御館町の集落が存在する微高地上に遺跡の中心があるものと想定する。銭畑遺跡は多量の銅銭の出土した地点より、北側に分布し、B地点まで銭畑遺跡が広がる可能性が高いが、以前の開発行為により地表面が掘削されており、遺物は出土していない。しかし、地元住民によれば、この地より多量の遺物が出土したとの話もあるため、当地まで銭畑遺跡の広がりを設定しておきたい。

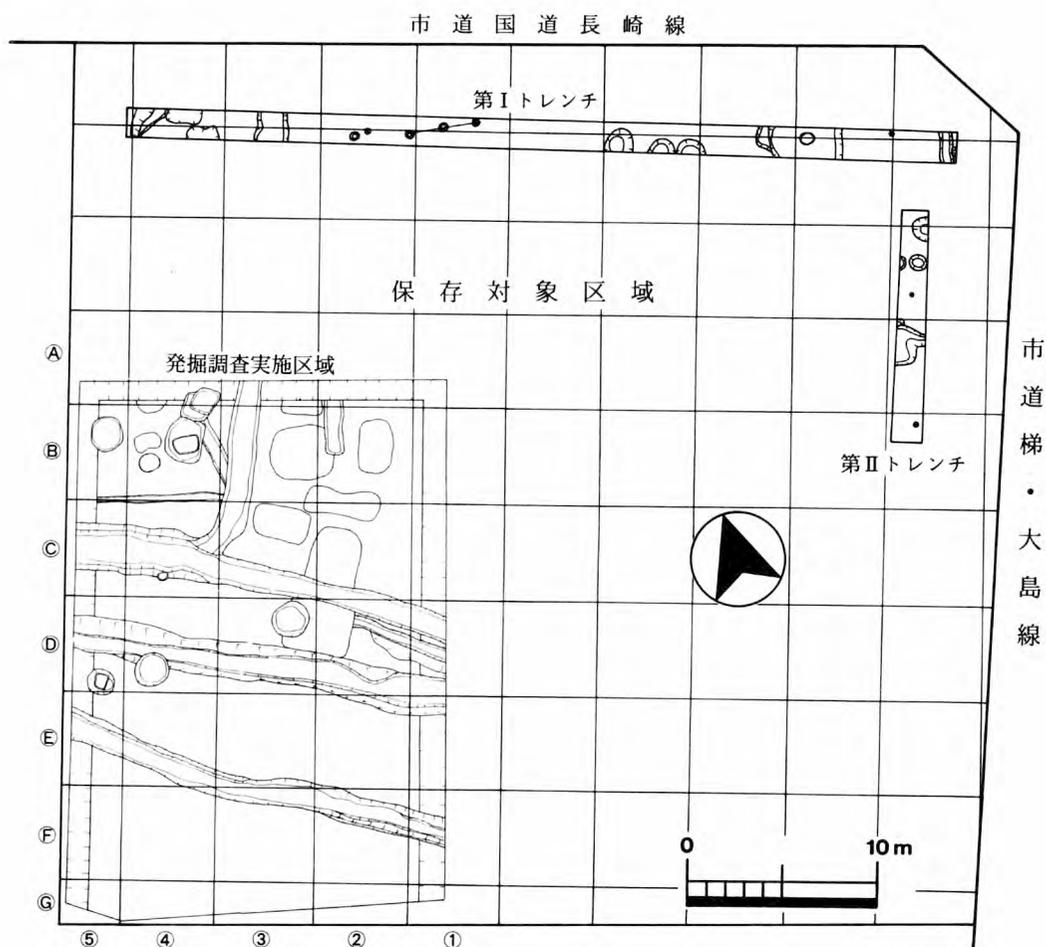
以上のように、御館町には北側に分布する御館遺跡と南側に分布する銭畑遺跡の2遺跡を設定することができるが、いずれも中世の集落遺跡である点では同質であり、広義では1遺跡として設

定可能と言える。また、遺跡設定した区域外にも少量ながら遺物の分布があり、遺物包含地としてはより広い範囲を遺跡として設定すべきかもしれない。

第2節 本調査の概要

第1項 発掘調査区域

発掘調査を実施した区域は、事務所兼車庫用地として地中の掘削が計画されている約600㎡を対象とし、全面発掘調査を前提とした。調査区域の区画は、磁北に近い向きで設計された方形の建物に沿って、5m×5mのグリッドを設定した。グリッドは東から西へ1～5とし、北から南へA～Gとした。



第4図 銭畑遺跡調査区域図 (S = 1/400)

調査方法は、田地経営時の耕作土が表土として厚く堆積していたため、耕作土と判断できる土層のみ重機力により剥ぎ取った。この耕作土は厚いところで50cm程度あり、遺物の包含もあったが、量としては少なく、掘削後その廃土より採集した。遺物包含層より地山までは人力により掘り下げた。この層は部分的に残存する箇所もあったが、耕作土下が直に地山となる部分があり、総体的には10cm程度の堆積で、褐色の鉄分の吹き出しが多量に存在する暗灰褐色土・黒褐色土の特徴をもつ。遺物包含層はグリッドごとに遺物の取り上げを行い、地山面で遺構の確認を行った。遺構覆土上層は褐色吹き出しを多量に含む黒褐色土または（黒）褐色土で、遺物包含層に近い土層の特徴をもち、比較的遺物の含有率が高く、近代の土坑等との識別が比較的容易であった。

遺構のナンバリングは北側より検出順に付け、土坑は井戸と判明しているものでも土坑として扱った。なお、近代遺構と判断したものは、遺構番号を付けず、平面図にプランのみ表示した。

当区域において検出された遺構は、東西に横断する大型の溝が3条と北側の1号溝から直行して北側に派生する大型の溝（2号溝）の4条の溝を主なものとし、他に小型の溝4条、土坑6基が確認された。これらの遺構は2号土坑が弥生時代中期の所産である以外は、遺構ごとに若干の時間差は認められるが、中世遺構として判断できるものである。

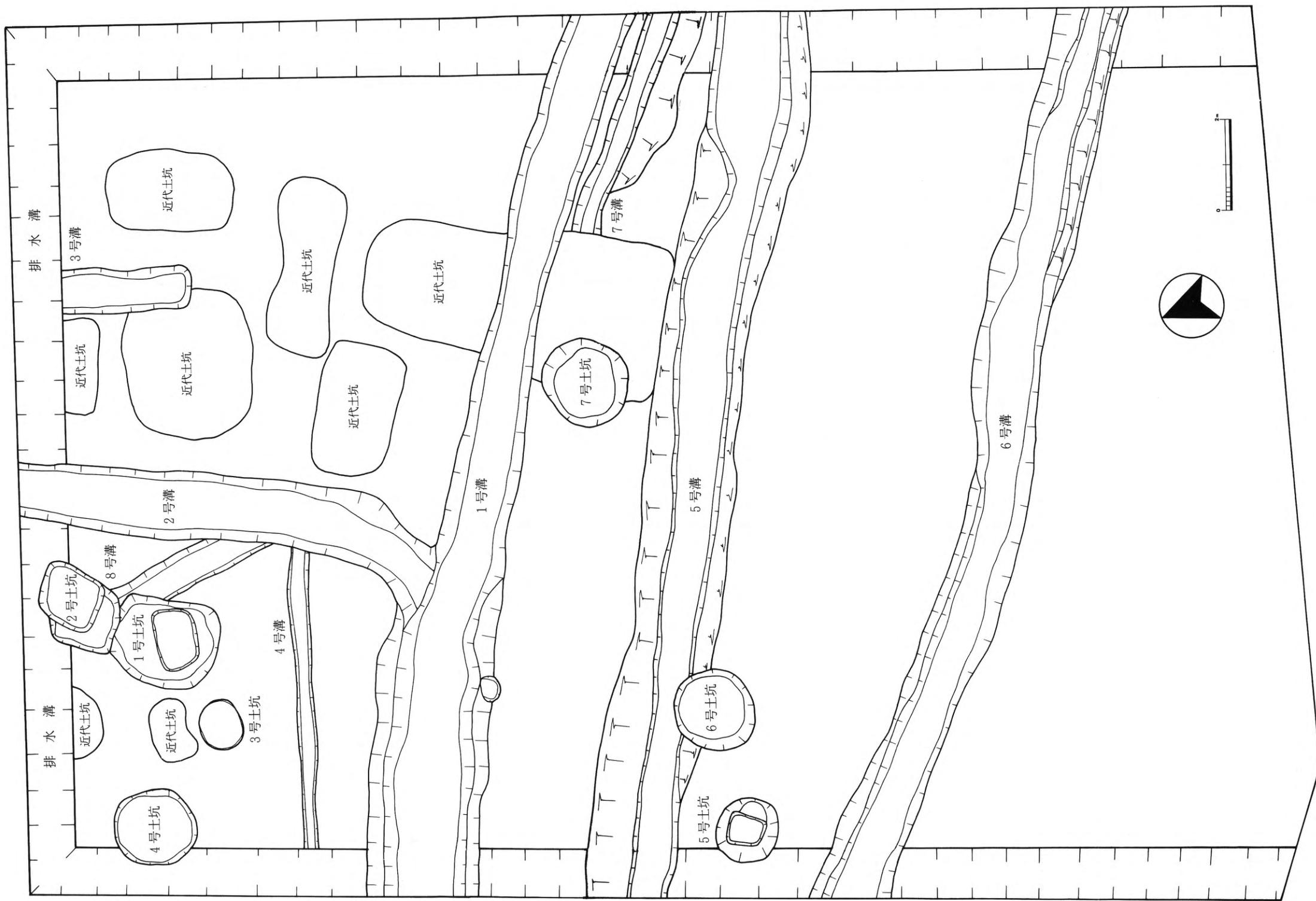
第2項 現状保存区域

駐車場の計画される区域は、盛土による簡易的工事であったため、発掘調査は行わず、現状保存区域とした。ただし、遺跡の広がりを記録しておくため、幅1mのトレンチを市道国道長崎線と市道梯・大島線に沿って、各1本ずつ設定し（市道国道長崎線沿い第Ⅰトレンチ、市道梯・大島線沿い第Ⅱトレンチ）、遺構分布と内容を確認調査した。

調査方法は現況面より地山面まで人力で掘り下げ、地山面で遺構確認を行った。当区域も発掘調査区域同様、耕作土が厚く、地山面上での遺物の出土は希薄であったが、その割に、遺構の検出が多く、溝3条と土坑7基、掘立建物跡の可能性をもつピット列が1箇所確認された。遺構のナンバリングについては発掘調査区域に継続し、同様の基準で付けた。当区域においても、8世紀後半として位置付けられる12号土坑以外は中世の所産とされるものが多く、発掘調査区域で検出された中世遺構群の中でも新しい時代に中心を置くと判断される。

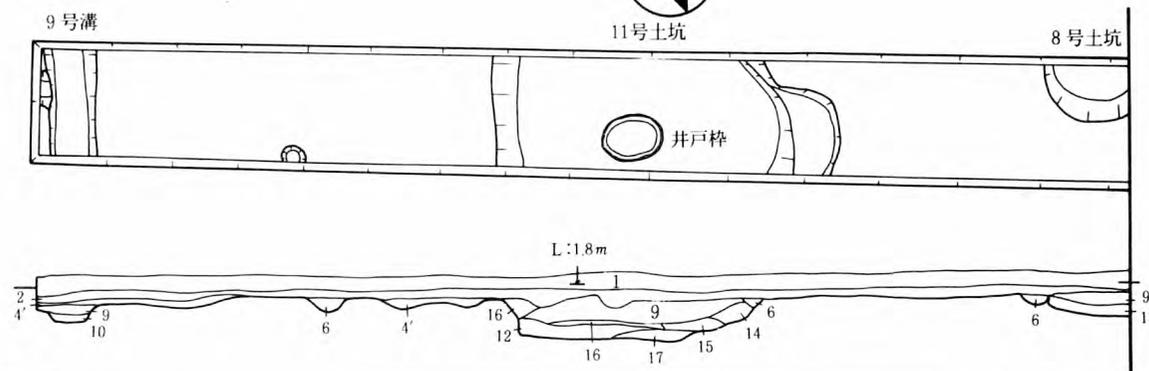
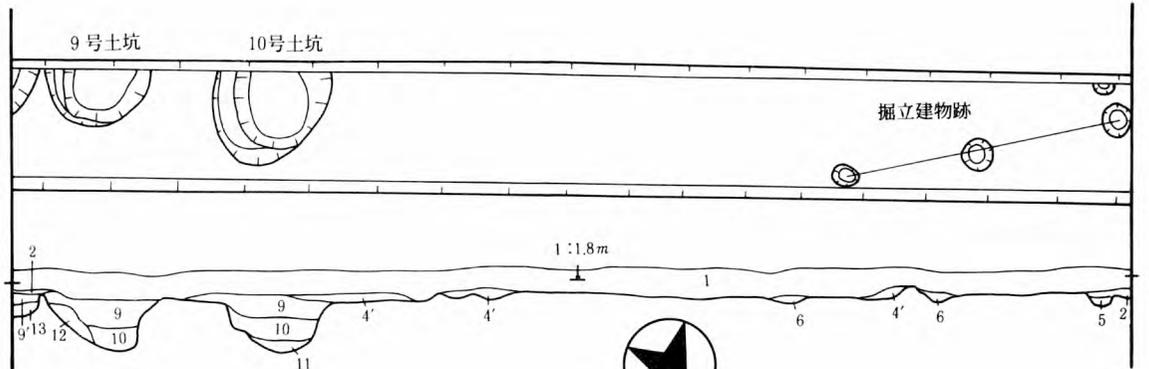
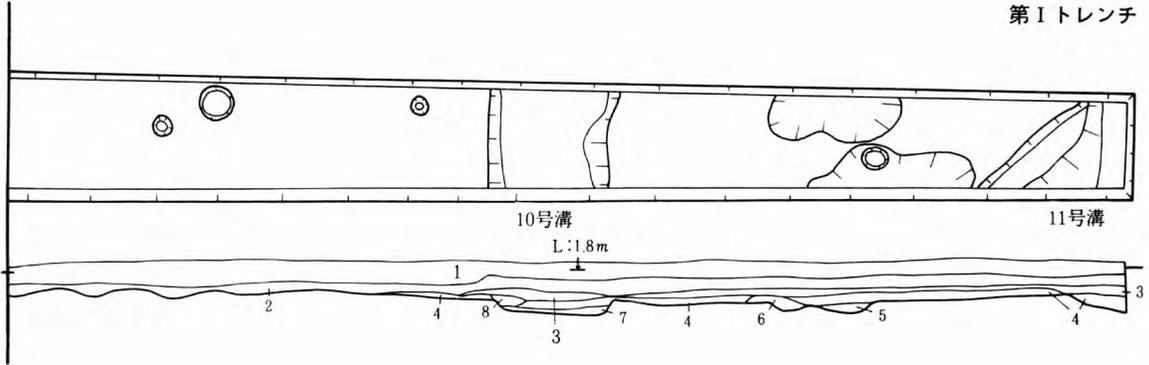
第Ⅰ・第Ⅱトレンチ土層註（第7図）

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1層 灰（褐）色粘質土：耕作土。 | 8層 （黒）褐色土：褐色吹き出し多量 |
| 1'層 暗灰褐色土：耕作土。 | 9層 黒褐色土：褐色吹き出し多量、炭化粒子多含有。 |
| 2層 暗灰（褐）色土：褐色吹き出し多量、炭化粒子含有。耕作土？ | 9'層 9層に黄土塊少量含有。 |
| 3層 暗灰（褐）色土：褐色吹き出し多量、灰褐色粘土塊混在。 | 10層 黒（褐）色土：褐色吹き出し少量、土器少量含有。 |
| 4層 黒褐色土：褐色吹き出し多量、灰褐色粘土塊少量炭化粒子・土器粒含有。 | 11層 黒色粘土：褐色吹き出しなし。 |
| 4'層 4層に黄土塊含有。 | 12層 黒（褐）色土：黄土塊多量、黒色粒子少量含有。 |
| 5層 黒（褐）色土：黄色砂少量混在。 | 13層 黒褐色土：黄土塊多量、炭化粒子・土器粒少量含有。 |
| 6層 黒灰褐色土：褐色吹き出し・炭化粒子少量含有。 | 14層 黒褐色土（弱黄色帯びる）：黄土粒子多量、炭化粒子少量含有。 |
| 7層 黒褐色土と黄色砂土の混在土。 | 15層 灰（褐）白色土：黒色土塊少量含有。 |
| | 16層 黒褐色土と黄白色砂土の混在した土。 |
| | 17層 青灰色砂土と黄色土の混在した土：黒色土塊含有。 |

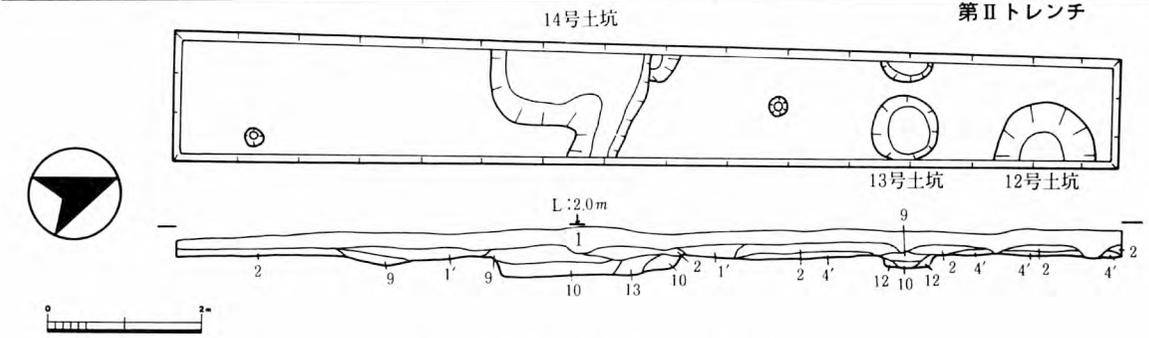


第5图 发掘调查区域全体图(S=1/100)

第Iトレンチ



第IIトレンチ



第6図 第I・IIトレンチ平面・土層セクション図 (S=1/100)

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 弥生時代の遺構と遺物

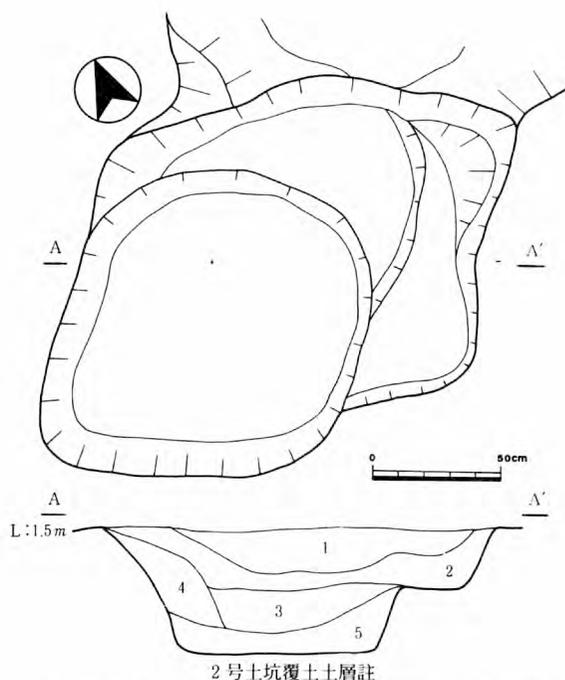
第1項 遺構（2号土坑）

弥生時代の遺構は発掘調査区域の北端に検出された2号土坑のみで、中世の1号土坑と一部重複する。遺構プランは右側に浅いテラスをもつ隅丸形状の土坑で、規模は短軸120cm、長軸155cm、深さは50cmを測る。遺構覆土は上層が右側テラスより続く褐色吹き出しを含む褐色系の土で、下層が炭化粒子・塊を多量に含む泥質の黒色土となっている。弥生土器は上層からも少量出土するが、大半は中世の遺物で、下層に集中してみられる。なお、下層からは弥生時代以外の遺物は出土しない。

第2項 遺物

弥生時代の遺物は2号土坑またはその周辺の1号溝覆土や包含層等からのみ出土している。器種は壺・甕・高坏・鉢などが確認されるが、大半は甕である。色調は6・8が淡橙褐色である以外は、全て暗褐色～淡黄褐色である。胎土については前者の色調を呈すものが、石英状の粒子を多量に含み、赤色粒子（焼土粒）や白色粒子を比較的多く含む特徴が見られるのに対し、後者の色調を呈すものは上記3種の粒子が疎らで、前者の土器には見れなかった角尖石が含まれている。また、甕の外面には煤の付着のあるものが目立ち、過半数を占める。

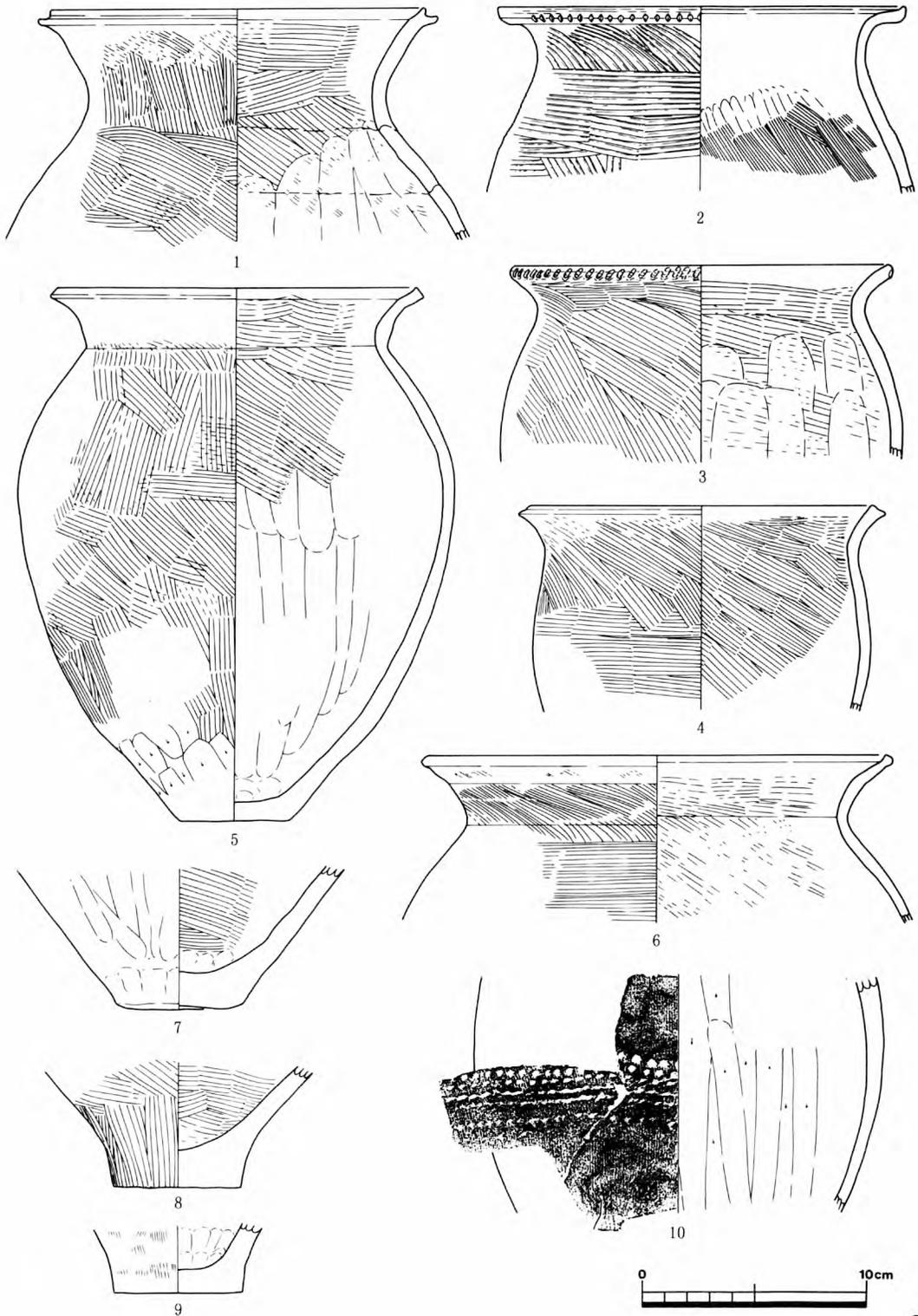
壺（1）は胴部上位以上の破片で、なで肩の肩部から口縁部で緩やかに外反して、強くくぼむ口縁端部へ移行する。頸部のすぼまりは概して弱く、広口壺状の器形を呈す。文様はなく、内外面とも刷毛調整を施し（外：口縁縦から斜め→胴部斜めから横、内：胴部斜め→口縁横）、胴部内面は縦方向の、口縁部内外面は横方向のナデ調整を施す。



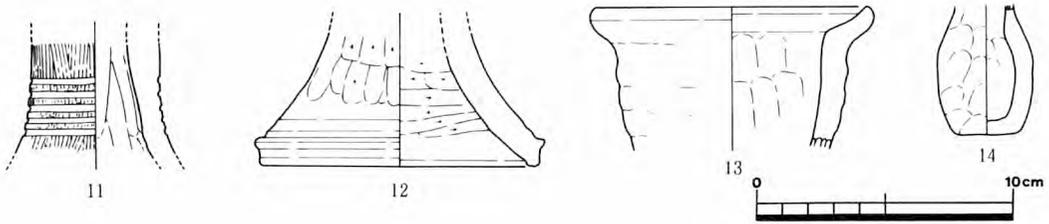
2号土坑覆土土層註

- 1層 暗褐色土：褐色吹き出し多量、黄白色砂質土塊多量、炭化粒子少量、土器多め含有。
- 2層 黒灰(褐)色土：褐色吹き出し微量、砂質帯びる。
- 3層 黒(灰)色土：炭化粒子少量、土器少量含有。砂質帯びる。
- 4層 黒(灰)色土と黄色砂土が混在する土層。
- 5層 純黒色土：炭化粒子多量、炭化塊少量、土器多量含有。泥炭粘土層。

第7図 2号土坑平面図・覆土セクション図(S=1/30)



第8図 弥生時代の土器 (1) (S=1/3) (全て2号土坑出土)



第9図 弥生時代の土器(2)(S=1/3)(11・12は1号溝、他は2号土坑)

甕は、口縁部器形から、頸部外反が弱く口縁部に最大径をもつA類、胴部に最大径をもち口縁部の外反するB類、胴部に最大径をもち、くの字状口縁をもつC類に分類可能である。

A類(4)は口縁端部の平坦な面取り状のもので、内外面を刷毛調整している。刷毛調整は外面で、胴部中位横方向後胴部上位から頸部斜め方向に施し、内面では下から口縁部に向かって縦→斜め→横方向で施され、口縁部上端のみナデ消している。

B類は口縁部が著しく外反して上端を若干つまみ上げる1類(2)と短めに外反する2類(3)がある。いずれも口縁端部の下端に刻み目をもち、前者はへら状工具で、後者は刷毛状工具で施している。調整は、外面で縦→斜め→横方向刷毛調整、内面で胴部上半以上横方向刷毛調整の後縦方向のナデを施すもの(3)と外面で縦→斜め→横方向後に肩部横方向の目の粗い刷毛調整、内面で棒状工具によるナデ調整後胴部付近斜め方向の目の細かい刷毛調整を施すもの(2)があり、いずれも口縁上端部内外面を横ナデ調整している。

C類は口縁端部の平坦なものと同丸味をもつものがあり、概して口縁部は長い。調整は外面で縦→斜め方向後肩部に横方向の刷毛調整、内面で斜め方向後口縁部横方向の刷毛調整を施すもの(6)と外面で縦→斜め→縦方向後胴部下半縦方向刷毛調整→縦方向へら削り調整、内面で縦方向ナデ調整後胴部上半以上斜め→横方向刷毛調整を施すもの(5)があり、口縁上端部内外面をやや幅広の横ナデ調整している。

以上の甕は無文であるが、胴部中位に文様を施すものが1片(10)出土している。外面は細か目の縦方向刷毛調整を施した後、先端のやや丸い断面六角形の棒状工具による横位連続刺突文を3段に、そしてその下に同様の工具によると思われる横位波状形文様を3段に施している。内面は縦方向のへら削りを施す。

7～9は甕または壺の底部破片で、7の外面と9の内面にナデ調整が施される以外は刷毛調整である。また、8は胎土・色調から6と同一個体になると思われるもので、底面にはへら削りが認められる。

11・12は高坏の脚部破片と思われる。11は外面縦方向の刷毛調整を施した後、5条の平行沈線文が施されているもので、内面には絞り痕が見られる。12は端部に面をもつもので、外面には縦方向のへら削り、内面には横方向のへら削りが施される。

13は口縁部に最大径をもつ小型の鉢と思われるもので、分厚く雑な作りのものである。内面に

指撫で痕が見られる。

14は口縁部を欠損する小型の壺状器種で、内外面とも手づくね状の指頭痕が見られる。

《土器の位置付け》

当資料は出土状態や焼成の色調またはススの付着などから、資料としては高い一括性をもったものと判断できる。ここで、当資料の特に甕の特徴についてまとめれば、以下の点が挙げられる。まず、器形であるが、A・B類の口縁部外反器形に加え、くの字状に近い口縁形態のものが見られる。口縁端部に平坦な面を形成するものが定量存在し、刻み目を施すものも存在するが、下からの刻みに統一される。文様では全ての破片を見ても10の横位刺突文が1点見られるだけで、文様を施さないものが基本となる。調整では、内外面とも下から順に縦→斜め→横方向の刷毛調整を基本とし、肩部外面横方向刷毛調整を意識的に施すものが定量見られる。また、刷毛調整後にナデ調整を施すものが見られ、口縁部上端内外面では一般的に、くの字状口縁のC類においてはやや幅広く横ナデを施す傾向をもつ。口縁部以外でも胴部内面に縦方向のナデ調整を施すものが見られ、少量ではあるが、一部ヘラ削りの施されるものも見られる。以上の特徴は、金沢市磯部運動公園遺跡の土器群に近似したものと判断できる。磯部運動公園遺跡の報告をまとめた増山仁氏はこの土器群についてまとめているが、ここで特に甕について列記すれば、①外面櫛描文を施す土器の割合が少ない。②凹線文系土器（凹線は1条）の出現。③胴部上半の横ハケ調整（文様）の出現。④弱い受け口状口縁（近江系甕）の出現。⑤甕と鉢の中間形態の出現。⑥口縁端部ナデ、面取りの存在。⑦内面胴部下半のナデアゲの存在。⑧口縁端部刻みの下方向からが多い。などが挙げられる。当資料は凹線文系土器や近江系甕の存在は確認できないが、他はほぼ同様の様相を示していると言え、増山氏も凹線文系土器は遺跡によって入る遺跡と入らない遺跡があるとしている。当遺跡でC類とした「く」の字状口縁の器形や口縁端部の面取り形態は凹線文系土器の影響により出現した可能性もあり、凹線文系土器が定着する以前の初源的な様相を示すものと評価したい。磯部運動公園遺跡に代表される当土器群は、櫛描文の盛行する小松式と凹線文系土器の定着する戸水B式の間を埋める土器群として評価を受けていることから、当土器群もこれに該当するものと思われる。

参考文献

- 橋本澄夫 1983 「北陸」『弥生土器Ⅱ』ニューサイエンス社
増山仁 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会

第2節 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

第1項 遺構

遺構として確認されるのは奈良時代後半の12号土坑のみで、他は溝等の覆土や包含層の出土で

ある。

12号土坑は現状保存区域の第Ⅱトレンチ北側で検出された遺構で、トレンチでは土坑の半分のみ調査した。遺構プランは直径120cm程度の楕円形状で、深さは20cm程度の浅いすり鉢状を呈す。遺構覆土は炭化粒子や焼土粒子・塊を含む黒褐色土で、下層に奈良時代後半の須恵器が、上・中層に平安時代の土師器が出土している。

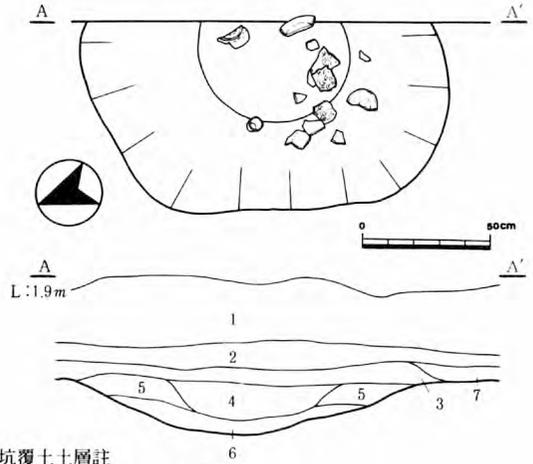
第2項 遺物

(12号土坑の遺物) 当土坑より出土した遺物は1～3の須恵器と4～6の土師器で、前者は下層より、後者は上・中層より出土している。須恵器は坏Bの蓋と身で、蓋(1)は口径12.2cm、器高2.9cmのⅡ類法量に属し、平坦な天井部から口縁部で短く折り返す器形を呈す。つまみは丸味を帯びた小型円筒形で、天井部調整はヘラ切り後のナデ調整である。身は口径15cm、器高5.6cm、台径11.2cmの大型Ⅰ類(3)と口径13cm、器高4.1cm、台径9.6cmの中型Ⅱ類(2)があり、前者は径高指数37、台径指数75、後者は32、74を測る。器形はⅠ類が厚手の底部から直立気味に立ち上がり、口縁部に向かって徐々に薄くなるもので、端面の平坦に接地する低い高台が立ち上がり部のやや内側に貼付される。Ⅱ類は底部からやや丸味をもって立ち上がる全体的に厚手の器形で、しっかりと踏ん張る高台が貼付される。いずれも底面はヘラ切り後のナデが施される。

以上の須恵器は胎土がいずれも細かい砂粒を多く含む南加賀窯産と思われるもので、遺物の残存率も比較的高く、一括性が高い。南加賀窯の窯跡に対比すれば、箱宮5号窯跡最終床面の資料に近似しており、8世紀第3～4四半期に位置付けられる。

土師器は小型甕と長胴甕のみ出土している。小型甕は頸部で外反し、口縁端部の上をつまみ上げる器形で、口径10.8cmの小型のもの(4)と推定口径13cm程度を測るやや中型のもの(5)がある。調整は前者が胴部上半カキ目調整、下半ナデ調整、後者が内面ナデ調整、外面剥落のため不明である。長胴甕は口径22cmを測るもので、頸部はくの字に外反し、口縁端部は比較的長く直立する。土師器甕の上記器形特徴は9世紀後半以降に該当し、胴部のカキ目調整が残存するのは9世紀末頃までと思われることから、9世紀後半代に位置付け可能である。

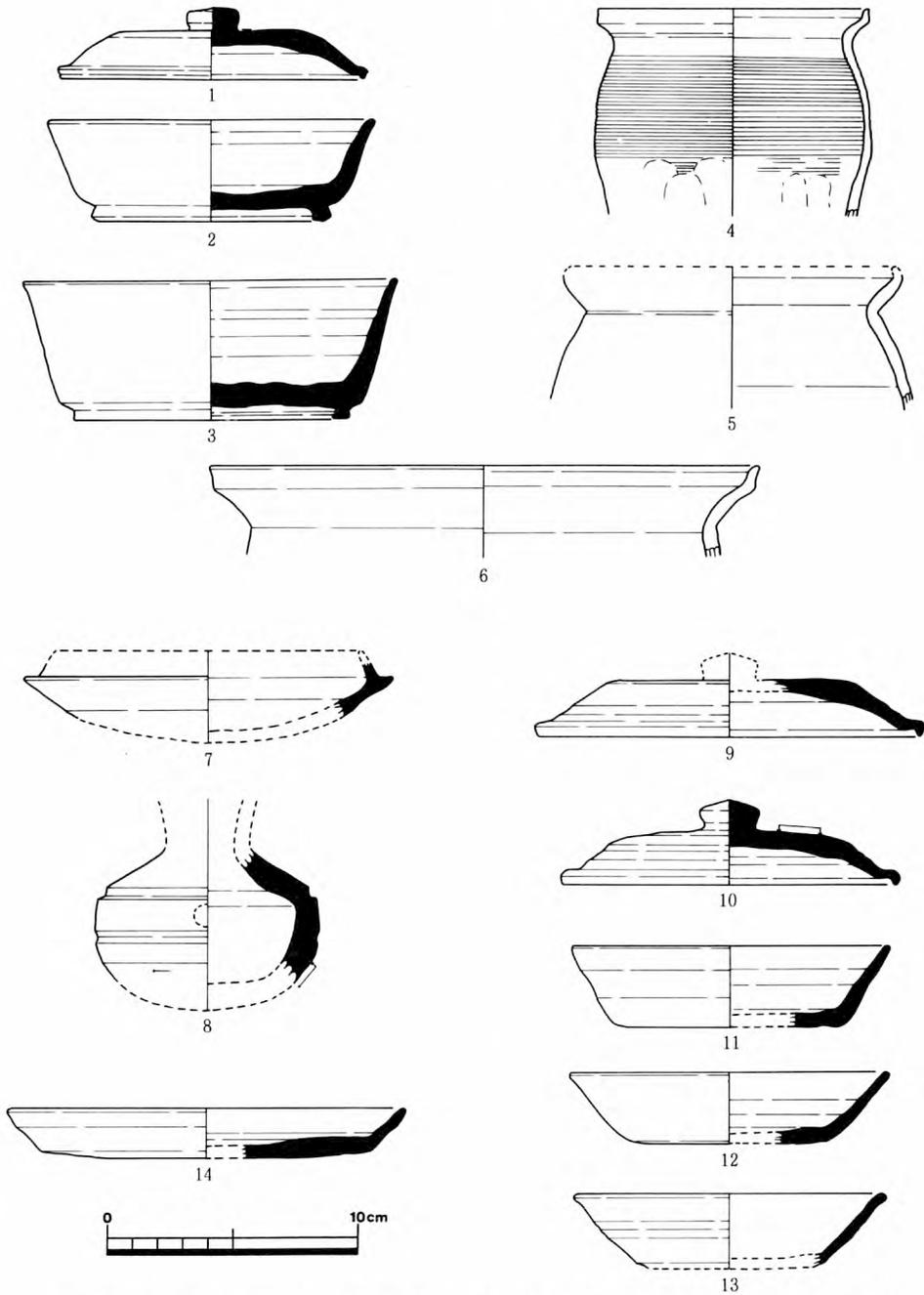
以上より、12号土坑の年代は下層の須恵器がこれに伴うものと判断し、8世紀後半に、上・中層の土師器は土坑廃棄後に廃棄されたものと判断する。



12号土坑覆土土層註

- 1層 灰(褐)色土：耕作粘土。
- 2層 暗灰(褐)色土：褐色吹き出し多量、炭化粒子・土器粒子少量含有。
- 3層 暗(灰)褐色土：褐色吹き出しあり、炭化粒子少量含有。
- 4層 黒褐色土：炭化粒子・焼土粒子少量含有。
- 5層 黒褐色土：炭化粒子・焼土粒子少量、黄褐色土粒子・塊多量含有。
- 6層 黒褐色土：炭化粒子・塊、焼土粒子・塊多量含有。
- 7層 黒褐色土：褐色吹き出し多量、黄土塊多め、炭化粒子少量含有。

第10図 12号土坑平面図・覆土セクション図 (S=1/30)



第11図 古墳時代～平安時代の土器（S = 1 / 3）（上段：12号土坑、下段：溝及び包含層）

（包含層の遺物）包含層及び中世遺構の覆土上層からは少量ではあるが、古墳時代から平安時代までの須恵器・土師器が出土している。資料としてまとまる時代はないが、時期のわかる遺物としては6世紀後半（7・8）、8世紀後半（11）、9世紀前半（9・10）、9世紀後半（12～14）の須恵器がある。図示したもの以外にも古墳時代前半の土師器や6世紀前半の須恵器、8世紀前

半の須恵器、9～10世紀の須恵器・土師器が存在するが、細片であり、まとまった出土の仕方はしていない。遺物量から見て、当該地に集落の存在は想定できないが、周辺に該期の遺跡が存在するものと予想され、松梨遺跡の広がりが当地域まで及ぶ可能性もあるが、南側に未確認の遺跡が存在する可能性もある。

《包含層遺物観察表》

番号	出土地	器種	法量	調整	焼成	色調	胎土	備考
7	Iトレンチ	坏G		ナデ	良好	青灰	南加賀産	
8	1溝上層	施		底外ヘラ削	良	灰白	辰口産	肩・胴沈線
9	6溝上層	坏B蓋	□15.3	天ナデ	良好	灰色	南加賀?	
10	2溝上層	"	□13.3 高3.4	天ヘラ削	"	灰白	"	ヘラ記号

番号	出土地	器種	法量	調整	焼成	色調	胎土	備考
11	6溝上層	坏A	□12.6,高33	底ナデ	良好	青灰	?	
12	11号土坑	"	□12.7,高29	"	"	"	南加賀産	
13	"	"	□12.3,高30	"	"	"	"	
14	6溝下層	皿A	□15.8,高20	"	"	"	"	

第3節 中世の遺構と遺物

第1項 遺構

1. 溝状遺構

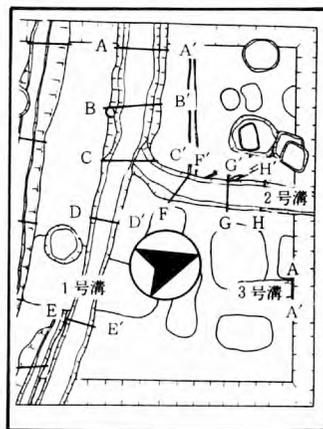
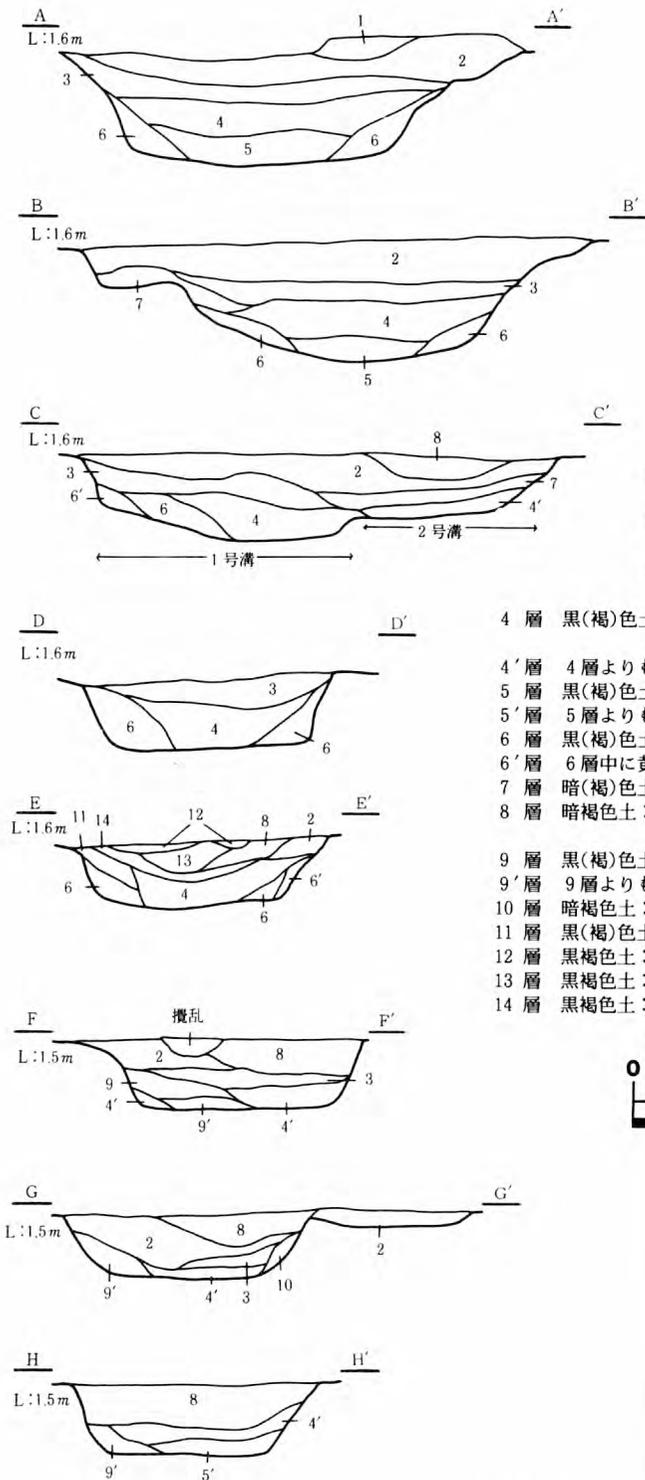
1・2号溝 発掘調査区域の北側で検出された溝で、東西に横断する溝を1号溝、南北にのびる溝を2号溝とした。1号溝は幅100～140cm、深さ35～45cmを測る溝で、断面形は逆台形状を呈し、2号溝との連結部分まではやや北よりに進行する。2号溝は幅120～150cm、深さ35～40cmを測る溝で、断面形は逆台形状を呈し、1号溝に連結する手前で、急に角度を西に振る。2本の溝は、Cラインの覆土セクションにおいて、2号が1号を切るような切り合い関係を認めることもできるが、覆土の内容は酷似しており、連結後のA・Bラインでは1本の溝の覆土の堆積を示しているため、同時併存したと考えるのが妥当である。

さて、この2本の溝は下底面のレベル差から1号溝が東から西へと1～2度で傾斜し、2号溝が北から南へと1度前後で傾斜していることが看取でき、同時に営まれた溝であると判断すれば、東からと北から直交する形で伸びてきた2本の溝が1本に合流したものと判断でき、1・2号溝合流後の溝は幅250～260cm、深さ60cm前後に拡大する。

覆土は上層で、褐色の吹き出しを多量に含む暗褐色系の砂質土が堆積し、下層では褐色吹き出しをもたない黒色系の泥質・粘質土が堆積する。また、溝の壁付近では地山の崩れた青灰色または黄灰色の砂土と黒色土が混在しており、壁面の崩れ方が著しかったことが看取できる。土器は上層より多く出土したが、下層からは木製品が出土しており、特に、1・2号溝合流後の西側部分で極めて多量に出土している。

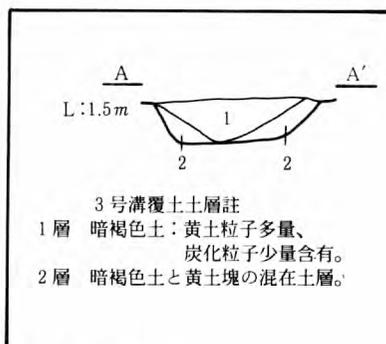
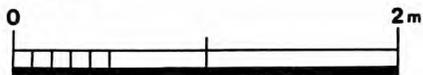
3号溝 発掘調査区域の北側、南北に伸びる溝で、溝の南側は立ち上がっている。幅は1m前後、深さは25cm前後で、断面形は逆台形状を呈する。覆土中より中世の土師器が数点出土している。

4号溝 1号溝の北側を東西に併走する幅40cm、深さ10cm前後の小型の溝で、断面形はU字形



1・2号溝覆土層註

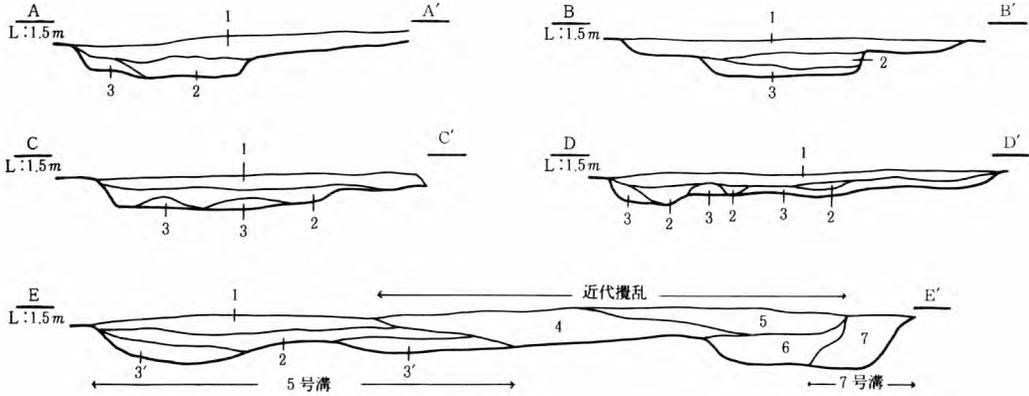
- 1層 暗(褐)色土：褐色吹き出し少量、若干砂質。
- 2層 暗褐色土：褐色吹き出し極めて多量、若干砂質。土器多量含有。
- 3層 暗(褐)色土：褐色吹き出し多量、若干粘質。
- 4層 黒(褐)色土：褐色吹き出しなし、粘質・泥質土。炭化粒子少量、土器少量、木製品多量含有。
- 4'層 4層よりも黒味薄く、木製品少量。
- 5層 黒(褐)色土：青灰白色砂土多量含有。若干砂質。
- 5'層 5層よりも黒味薄い。
- 6層 黒(褐)色土と青灰白色砂土が混在する土層。
- 6'層 6層中に黄白色砂土多量混在。
- 7層 暗(褐)色土と黄褐色土の混在する土層。
- 8層 暗褐色土：褐色吹き出し多量、黄白色粘土塊多量、黒色土塊少量含有。
- 9層 黒(褐)色土：粘質土。黄白色粘土塊多量混在。
- 9'層 9層よりも黄白色粘土塊多量混在。
- 10層 暗褐色土：褐色吹き出し多量、黄白色粒子多量含有。
- 11層 黒(褐)色土：黒色土塊・黄白色砂土塊含有。砂質土。
- 12層 黒褐色土：黄白色砂質土塊少量含有。近代攪乱土。
- 13層 黒褐色土：黄白砂質土塊多量含有。近代攪乱土。
- 14層 黒褐色土：黄褐色土塊多量、黄白色砂土塊少量含有。近代攪乱土。



3号溝覆土層註

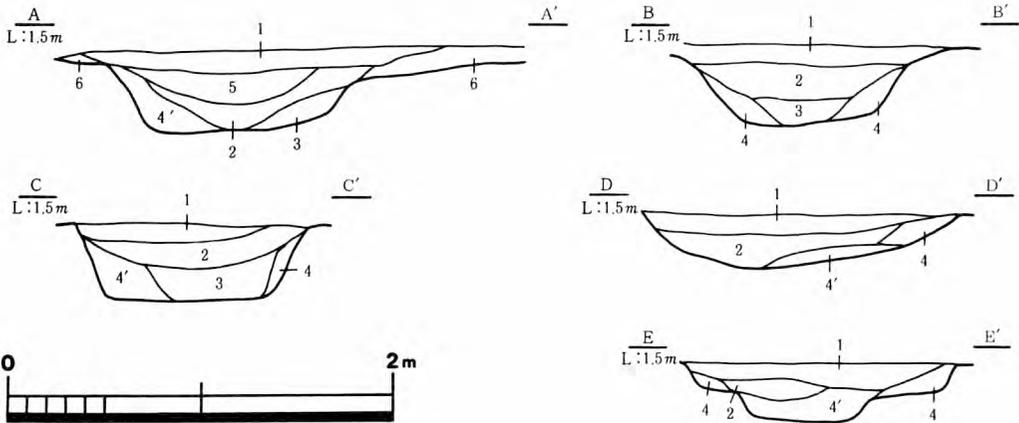
- 1層 暗褐色土：黄土粒子多量、炭化粒子少量含有。
- 2層 暗褐色土と黄土塊の混在土層。

第12図 1・2号溝・3号溝覆土セクション図 (S=1/40)



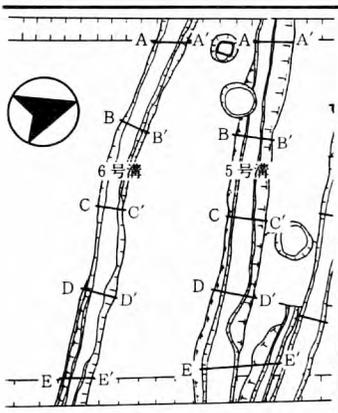
5号溝覆土土層註

- | | |
|---|---|
| 1層 (黒)褐色土：褐色吹き出し多量、砂質帯びる。
炭化粒子多め、土器含有。 | 4層 黒(褐)色土中に黒褐色土混在する土層。
褐色吹き出しあり。 |
| 2層 黒褐色土：褐色吹き出し少量、粘性帯びる。
炭化粒子少量含有。 | 5層 黒褐色土中に黒色土混在する土層。
褐色吹き出しあり。 |
| 3層 黄白色粘土中に黒褐色土混在する土層。 | 6層 黒色土中に黄白色粘土塊混在する土層。 |
| 3'層 黄色砂土中に黒褐色土混在する土層。 | 7層 黒褐色土：7号溝覆土。褐色吹き出しあり。
炭化粒子少量、土器含有。 |



6号溝覆土土層註

- | |
|--|
| 1層 黒灰褐色土：褐色吹き出し多量、炭化粒子多め含有。 |
| 2層 黒灰(褐色)：褐色吹き出しなし、炭化粒子少量・木製品含有。
砂質帯びる。 |
| 3層 黒灰色土：褐色吹き出しなし、木製品含有。砂質帯びる。 |
| 4層 黒灰色土と黄白砂質土の混在土：木製品含有。 |
| 4'層 黒灰色土と青灰白色砂質土の混在土。 |
| 5層 青灰白色砂質土中：黒褐色土塊多量混在。 |
| 6層 暗灰色土：黄白色砂質土塊含有。 |



第13図 第5・6号溝覆土セクション図 (S=1/40)

を呈し、東側は2号溝と連結している。覆土は1号溝の上層と同様の土が堆積しており、遺物は中世の土師器が数点出土している。

5号溝 発掘調査区域の中央付近、1号溝の南側を東西に併走する溝で、西側の南側壁が5号土坑に一部切られている。溝の幅は180~220cm、深さは20~30cmを測り、総体的に浅く、溝底面の傾斜はほとんど確認できない。溝の形態は中央が逆台形状に落ち込み、周縁が緩やかに立ち上がるもので、中央の落ち込みは幅100~150cm、深さ10cmを測る。

覆土は上層が褐色吹き出しを多量に含む1号溝の上層に共通する土層を示し、下層は褐色吹き出しの少ない、粘質の黒褐色土となっている。遺物は木製品の出土は少なく、中世土器がほとんどで、浅い割に多量に出土している。

6号溝 発掘調査区域の南側、5号溝の南側を若干蛇行気味に西北から東南に横断する溝で、幅120~150cm、深さ30~40cmの規模を測る。溝の断面形は逆台形状または緩やかな皿状を呈し、東側で中央が落ち込む形状になる。溝の傾斜は東から西へ1度程度で緩やかに下がっており、湧水は西へと流れている。

覆土は他の溝と同様、褐色吹き出しを多量に含む黒褐色土が上層に堆積し、中下層では、褐色吹き出しをもたない砂質の黒灰色土が堆積している。また、中下層では湧水の著しいこともあって、木製品が多量に遺存している。

7号溝 発掘調査区域の東側、5号溝の南側を併走する小型の溝で、溝の西側が近代の攪乱によって切られているため、状況は不明である。規模は幅60cm、深さ30cmを測り、断面形状は逆台形状を呈す。覆土は5号溝の上層に近い、褐色吹き出しを含む黒褐色土の一層で、中世土師器が少量出土している。

8号溝 2号溝の東側より北西に派生する溝で、幅80cm、深さ10cmを測る浅い断面皿状を呈す。覆土は2号溝上層の褐色吹き出しを多量に含む暗褐色土一層で、中世土師器が少量出土している。

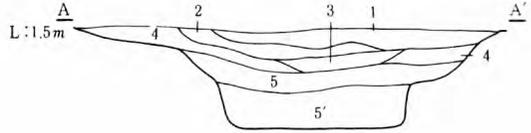
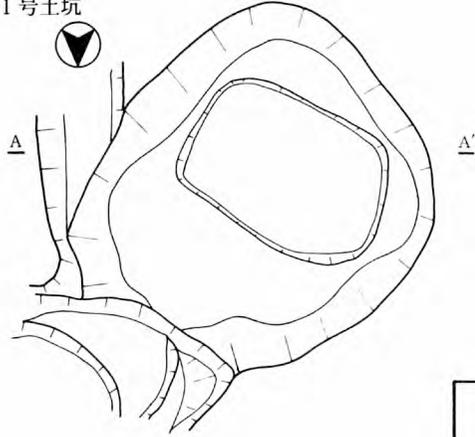
9~11号溝 第Iトレンチより検出した遺構で、9号溝はトレンチの東端に、11号溝は西端に、10号溝は11号溝のやや東側に存在し、11号溝がトレンチに斜行する以外は、直行して南北に走る。いずれも浅い溝で、覆土には褐色吹き出しを多量に含む黒褐色土が堆積しており、他の溝の上層に堆積している土層と共通している。

2. 土坑

1号土坑 発掘調査区域の北側、2号土坑を切って存在する土坑で、8号溝とも重複している。土坑のプランは短軸210cm、長軸250cmの隅丸方形で、南寄りに100×140cmの方形の落ち込みが存在する。深さは、落ち込み下底面までで70cmを測り、底面地山では砂層となり、湧水が著しい。形状から、井戸と推察するが、落ち込み部分が井戸枠の設置した箇所と予想される。覆土は上層が褐色吹き出しを含む暗褐色土、下層が泥土の堆積したと思われる黒色土となっている。

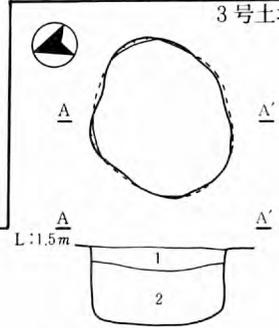
3号土坑 1号土坑の西側に存在する90×100cm程度の楕円形の土坑で、深さ50cm程度を測る。覆土の状況は、1号土坑と同様、下層では黒色土が堆積し、下底面の地山は砂層となり、湧水が

1号土坑



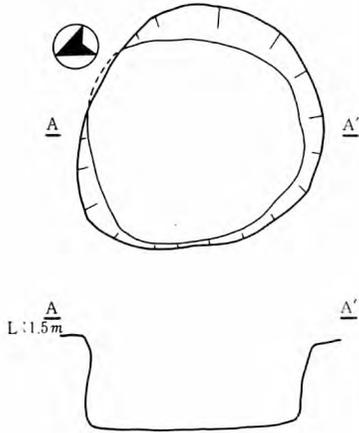
- 1号土坑覆土土層註
- 1層 暗褐色土：褐色吹き出し多量、黄白色砂土塊多量、炭化粒子少量、土器多め含有。
 - 2層 暗(褐)色土：褐色吹き出し少量、黄白色砂土塊少量、炭化粒子少量含有。
 - 3層 黒褐色土と黄白色砂土の混在土。
 - 4層 黒灰(褐)色土：褐色吹き出し少量、砂質。
 - 5層 黒(灰)色土：炭化粒子少量土器少量含有。砂質。
 - 5'層 土器・炭化粒子を含まない。

3号土坑

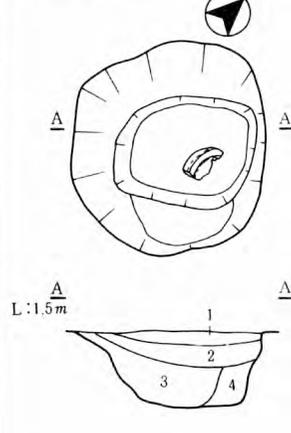


- 3号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土：褐色吹き出しあり、土器含有。
 - 2層 黒(灰)色土：褐色吹き出しなし。

4号土坑

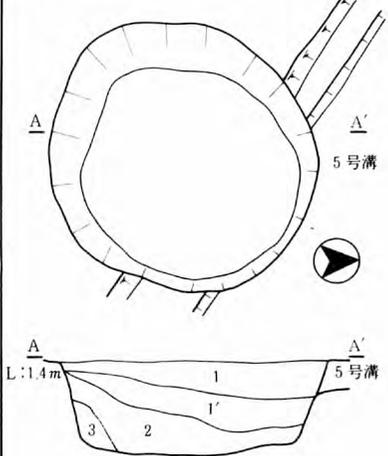


5号土坑



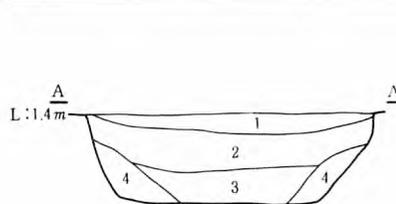
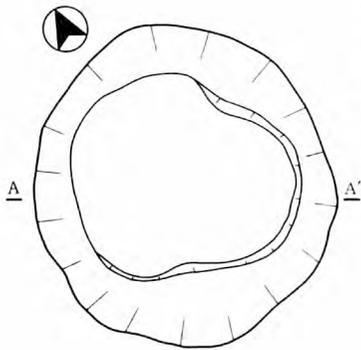
- 5号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土：褐色吹き出し多量、焼土粒子・炭化粒子少量含有。
 - 2層 淡黒褐色土：青灰色砂土、炭化粒子少量含有。
 - 3層 黒(褐)色土：黄白色土粒子少量含有。粘性強い。
 - 4層 黒褐色土と黄白色砂土の混在した土層。

6号土坑

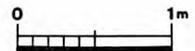


- 6号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土に黄白色砂質土が混在した土層。
 - 1'層 黄白色砂質土の混在量が多い。
 - 2層 黒褐色土：褐色吹き出しなし。炭化粒子・木製品少量含有。粘質土。
 - 3層 黒褐色土と黄白色砂土の混在した土層。

7号土坑



- 7号土坑覆土土層註
- 1層 黒褐色土：褐色吹き出し多量、黄白色土塊多量・炭化粒子少量含有。
 - 2層 黒(褐)色土：黄白色粘土塊極めて多量含有。
 - 3層 黒(褐)色：黄白色粘土多く、黄白色粘土少量含有。粘性強い。
 - 4層 黄白色砂質土：黒褐色土少量混在。



第14図 1・2・3・4・5・6・7号土坑平面・土層セクション図 (S=1/50)

著しい。井戸の可能性が高い。

4号土坑 発掘調査区域の西北端に存在する土坑で、直径160cmを測る円形プランを呈す。下底面までの深さは60cmで、湧水が激しく、井戸の可能性が高い。しかし、地山が砂層で、掘り下げる途中、壁面が流出・崩壊し、下底面に砂が堆積するため、下底面の状況は不明であった。

5号土坑 発掘調査区域の西側、5号溝と6号溝の間に存在する土坑で、120×140cmの楕円形プランを呈す。断面形は壁面が段状に落ち込み、下底面までの深さは50cm程度を測る。ここでも湧水が激しく、この落ち込み部分に井戸枠が設置されたものと予想されるが、確証はない。覆土は他の土坑と同様で、下底面地山で砂層を呈し、下層より石臼が出土している。

6号土坑 5号土坑の東に位置し、5号溝を切って存在する。形状は直径180cmの円形の土坑で、円筒形に落ち込み断面形で、深さは60cmを測る。覆土は他の土坑と同様で、下底面で砂層を呈し、井戸の可能性が高い。

7号土坑 発掘調査区域の中央、1号溝と5号溝の間に存在する土坑で、直径2mの円形プランを呈す。下底面までの深さは60cmを測り、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は他の土坑と同様であるが、地山である黄白色粘土・砂が中下層に混在する。下底面は砂層で、湧水が著しく、井戸の可能性が高い。

8～10号土坑 第Iトレンチの中央付近より検出した土坑で、トレンチの南側に半分かかる状態で、3基並列して存在する。8号土坑は直径約130cmの円形プランを呈し、皿状に落ち込む深さ30cmの浅い土坑である。湧水はなく、井戸とは考えられない。9号土坑は直径約140cmの楕円形プランを呈するもので、深さ80cmを測る。10号土坑は直径約150cmの楕円形プランを呈するもので、深さは80cmを測り、壁に段をもつU字状の断面形を呈す。9・10号土坑は井戸と予想されるが、特に10号土坑からは上層よりまとまった中世陶器が、下層から木製横櫓が出土している。

11号土坑 第Iトレンチの東側で検出された幅380cmの底面の平坦な竪穴状遺構で、井戸枠が設置してある。竪穴の深さは60cm前後で、両側が調査区域外に伸びているため、内容は不鮮明であるが、井戸枠が設置してあること、底面が広く平坦であることから考え、井戸の周辺に設けたテラス状遺構の性格を想定したい。この井戸は平面形が80×60cmの楕円形を呈し、表面に露出した部分では長方形の板材が25枚縦に組まれていた。また、1段目と2段目では2段目の方が5cm程径が小さく、板材の枚数も異なる。下底まで調査していないため、全体の構造を述べることはできないが、桶積みによる井戸ではないかと思われる。

13・14号土坑 第IIトレンチより検出された土坑で、13号土坑は北側に、14号土坑は南側に存在する。13号土坑は直径70cm、深さ20cmの円形プランを、14号土坑は2m程度の方形状を呈す。

3. その他の遺構

第Iトレンチより、数本のピットが検出されているが、そのうちの3本が東西に並んでいる。ピットの大きさは、直径30cm程度で、覆土は中世遺構に入り込んでいる褐色吹き出しをもつ黒褐色土を呈す。ピット間隔は180cm前後で、掘立柱建物跡の可能性が高い。

第2項 遺物

本遺跡から出土している中世遺物は、舶載磁器、加賀、越前、珠洲、常滑、瀬戸・美濃系陶器（以下中世陶器と呼称することもある）、中世土師器、瓦質陶器等の焼成品のほか、木製品、石製品等が見られる。

焼成品の総破片数は10,919点で、中世土師器が10,554点と96.7%を占めている。ついで加賀が87点（0.8%）、越前が55点（0.5%）、舶載磁器が54点（0.49% 青磁35点、白磁13点、青白磁1点、明代染付5点）、珠洲が25点（0.23%）、瀬戸・美濃系陶器が17点（0.15%）、肥前系染付磁器が14点（0.13%）、唐津が6点、瓦質陶器が6点（各0.05%）、常滑が3点（0.03%）である。その他、小片で産地同定が不明の瓷器系陶器が54点（0.49%）、同じく不明の陶器が31点（0.3%）、同じく産地が不明の染付磁器が2点（0.02%）、土錘が11点（0.1%）である。この数値・割合はあくまでも破片数であり、個体識別法・口縁部計側法はとらなかった。また、中世土師器は接合を行った後の数値であり、厳密な意味での破片数計側法ではない。これは、中世土師器以外はほとんど接合ができなかった結果である。

（1）舶載磁器（第15図）

1から9までは青磁で10・11は白磁である。

1は5号溝より出土したものであり、口径15.8cmを測る碗である。内面に草花文（蓮華文）が描かれていて、龍泉窯系青磁と考えられる。

2は口径10.0cmを測る坏で、口縁部を外反させていてやや平坦面を成している。小片でやや不明瞭であるが、外面に蓮弁もしくは花文の線刻が一部認められる。やはり龍泉窯系青磁と考えられる。

3は口径6.4cmを測るもので、壺或いは瓶子の口縁部と考えられるものである。小片のため判然とはしないが、釉が器肉に比べて厚い。

4は碗であり、外面には楕状具よる線刻が認められる。内面は上位に沈線が施され、その下にヘラ状具により花文と思われる線刻が認められる。同安窯系青磁と考えられる。

5は碗であり、釉は厚いところで1mmに達している。龍泉窯系青磁と考えられる。

6は碗であり、外面にやや雑な蓮弁が認められる。龍泉窯系青磁と考えられる。

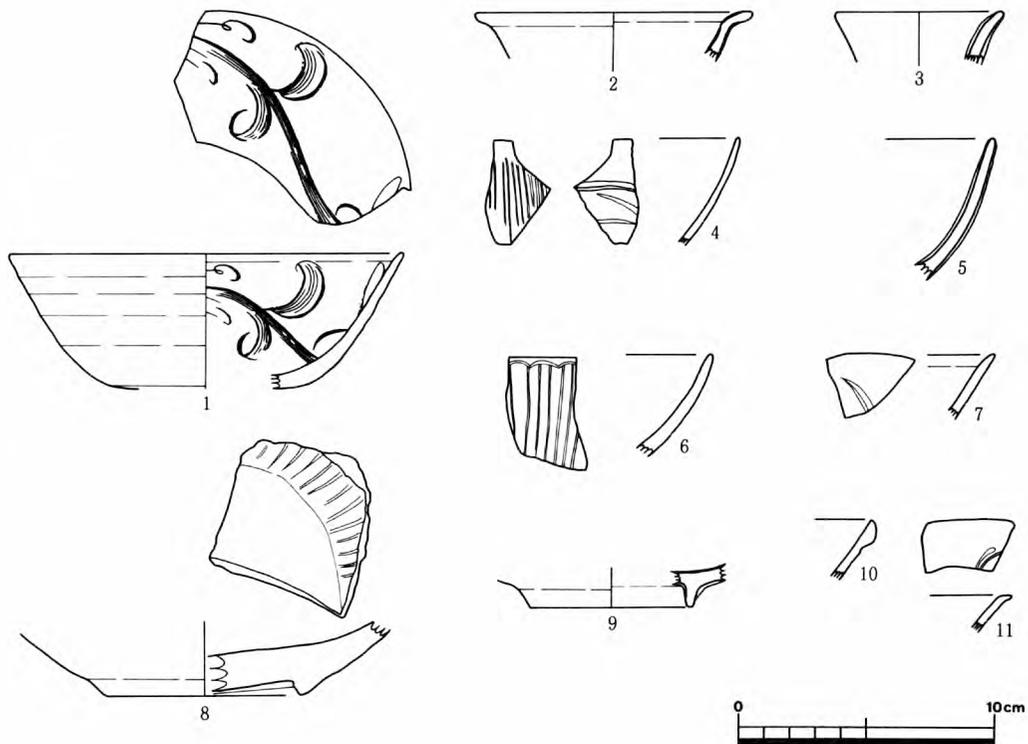
7は5号溝から出土したもので、やや薄手の碗である。内面に花文の一端が認められる。

8は高台径7.5cmを測るもので、内面にヘラ状具による線刻が認められる。高台は、外底部内側を回転ヘラ削りして高台状にしたものであろうか。この部分には釉がかけられていなく、境目には一部釉が流れて飴色となっている。

9は高台径6.2cm測る小碗か坏である。

10は5号溝より出土していて、口縁部を玉縁にしている白磁碗である。

11は口縁端部をやや外反させる白磁碗である。



第15図 青磁・白磁実測図 (S = 1 / 3)

以上、舶載磁器について述べてきたが、時期については1・6は12世紀中～13世紀初め頃、10は11世紀末～12世紀前半代の頃のものと考えていて、他は不明である。

(2) 中世陶器 (第16～18図)

1～5・7は加賀、8～17は越前、18～22は珠洲、23・24は常滑、27～30は瀬戸・美濃系陶器である。以下、各製品について略述してみる。

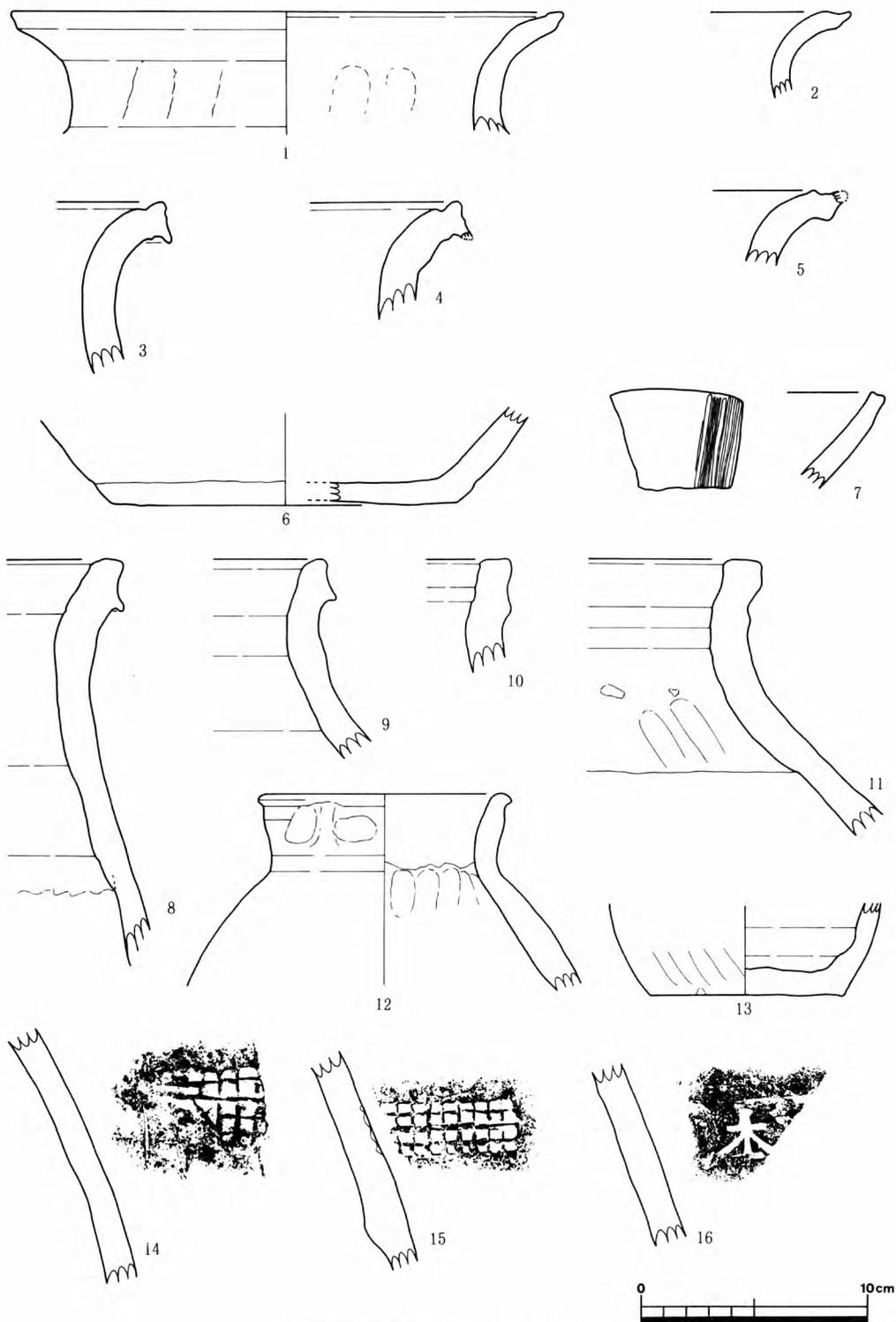
加賀古窯製品 (第16図)

1は口径24.4cmを測る甕であり、口縁部は外へ引き出してただけで端部は押さえず、摘んでナデている。頸部の外面もヨコナデ痕が顕著に認められる。6号溝よりの出土である。

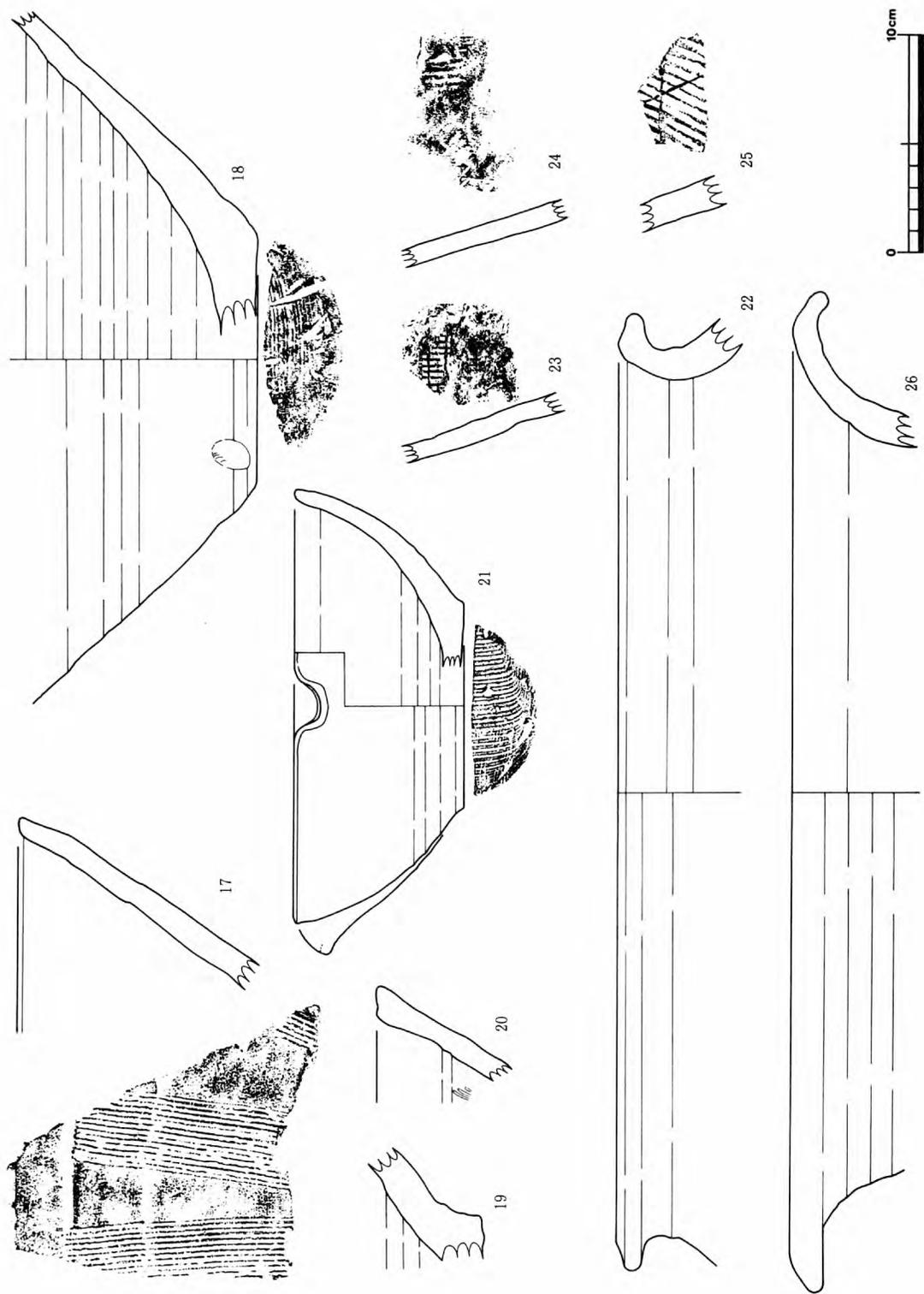
2も甕であり、同じく口縁部を引き出しただけで、端部は摘んでナデているものである。

3・4も甕であるが器肉は厚い。口縁端部を押さえて縁帯を作っているが、やや幅が狭く下端の張り出し(垂れ下り)も小さく、いわゆるN字状口縁の前段階と考えられるものである。両者とも6号溝よりの出土である。

5も甕で、口縁部を引き出して、端部外面をやや押さえて面を作り(狭い縁帯といえなくもない)、のち、摘んでナデて内側が凹みと稜が認められる。



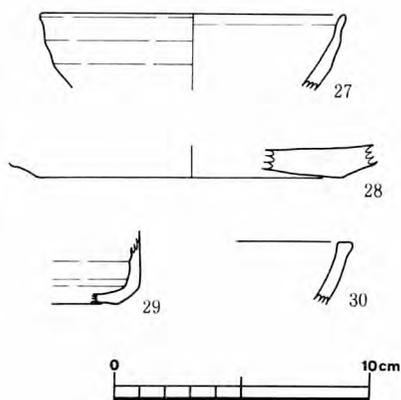
第16图 中世陶器実測図 (S = 1 / 3)



第17图 中世陶器实测图(S = 1 / 3)

7は鉢であり、8～9条のおろし目が認められる。端部は凹んでいる（凹がめぐる）。

以上、加賀古窯製品について述べたが、これらの時期については1・2・5が第Ⅱ期のものと考えられ、つきつきつめれば1・2は那谷カナクソダニ（那谷1号）窯期、5はやや後出の那谷コテンノウダニ窯期に比定できる。年代としては13世紀前半代を考えている。3・4は第Ⅲ期もので、那谷ダイテンノウダニ窯期に比定でき、年代は13世紀中頃から後半代を考えている。



越前古窯製品（第16・17図）

第18図中世陶器実測図(S=1/3)

8・9は甕でいわゆるN字状口縁がくずれた（退化）したものと考えられる。8は上面がほぼ水平になっている。8は6号溝よりの出土である。

10・11も同じく甕であるが、さらにN字状の折り返しがなくなり、上面は完全に水平となっている。11は6号溝よりの出土である。

12は壺で、口径10.4cmを測る。口縁部はやや外開きで、端部は丸く仕上げ外にややつまみだしている。口縁部外面に指頭で押さえた跡が残り、この部分の内側にヘラ状具よる縦の刻み目を入れていて角ばっている。これは中の液体などを注ぎやすくするための口とも考えられる。6号溝よりの出土である。

13は壺の底部で、底径8.5cmを測る。外面下端近くはヘラケズリの痕跡が残る。

14・15・16は押印のある破片で越前としたが、16以外は加賀・その他である可能性も否定できない。

17は鉢で、14条1単位のおろし目が施されている。また、片口の痕跡も認められる。

以上、越前古窯製品について述べたが、これらの時期について考えてみれば、8・9は15世紀代、10・11は15世紀末から16世紀前半代の所産と考えている。

珠洲古窯製品（第17図）

18は鉢か壺で底径11.5cmを測る。外底部には静止糸切痕が認められ、内面はおろし目は認められないが磨耗（使用痕と考えられる）が激しい。壺の底部付近の可能性が大きいが、その場合、割れたものを鉢として再利用したため使用痕が認められるのであると考えている。2号溝よりの出土である。

19は瓶子あるいは壺と考えられるものの底部片である。

20は鉢であり、口縁端部はほぼ水平となっていて、浅い凹がめぐる。また、片口の痕跡が認められ、内面にはおろし目が見られる。1号溝と2号溝が合流した後の溝（以下「1・2号溝」と

呼称する。)よりの出土である。

21は小型の鉢で口径19.5cm、器高7.8cm、底径9.5cmを測り、外底部には静止糸切痕が認められる。また、片口であり、おろし目は認められない。内面は磨耗が激しく、よく使用されものと考えられる。5号溝よりの出土である。

22は甕で口径41.0cmを測る。口縁端部は外に引き出していて、丸みをもっている。

以上、珠洲古窯製品について述べたが、これらの時期について考えてみると、21の鉢はやや古く珠洲第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけてのものと考えていて、12世紀後半から13世紀初め頃のものであろうか。しかし、前述のように本品は使用が長期にわたっていたものと考えられ、廃棄された時期はその後ということになる。22の甕もやはり古く珠洲第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけてのものと考えている。

常滑古窯製品（第17図）

23・24は押印部分の破片である。23は正格子のもの、24も不明瞭であるが正格子と考えられるものである。26は甕であり口径43.0cmを測るもので、やや砂粒分が多いため焼き歪みが認められる。時期は12世紀前半頃のものであろうか。

瀬戸・美濃系製品（第18図）

27は天目茶碗で小片であるので口径は推定で11～12cmである。内面口縁部と外面の稜の部分は磨耗か風化かわからないが釉がかすれている。

28は皿の底部片であり、糸切痕が認められる。

29・30は香炉と考えられる破片である。

以上、瀬戸・美濃系製品について述べたが、浅学な筆者では時期は不明と言わざるをえない。

その他不明製品

6は甕あるいは壺の底部で底径15.2cmを測り、内面に横位のハケ目が認められる。

25は押印のある破片である。現在この意匠の押印は産地が不明である。

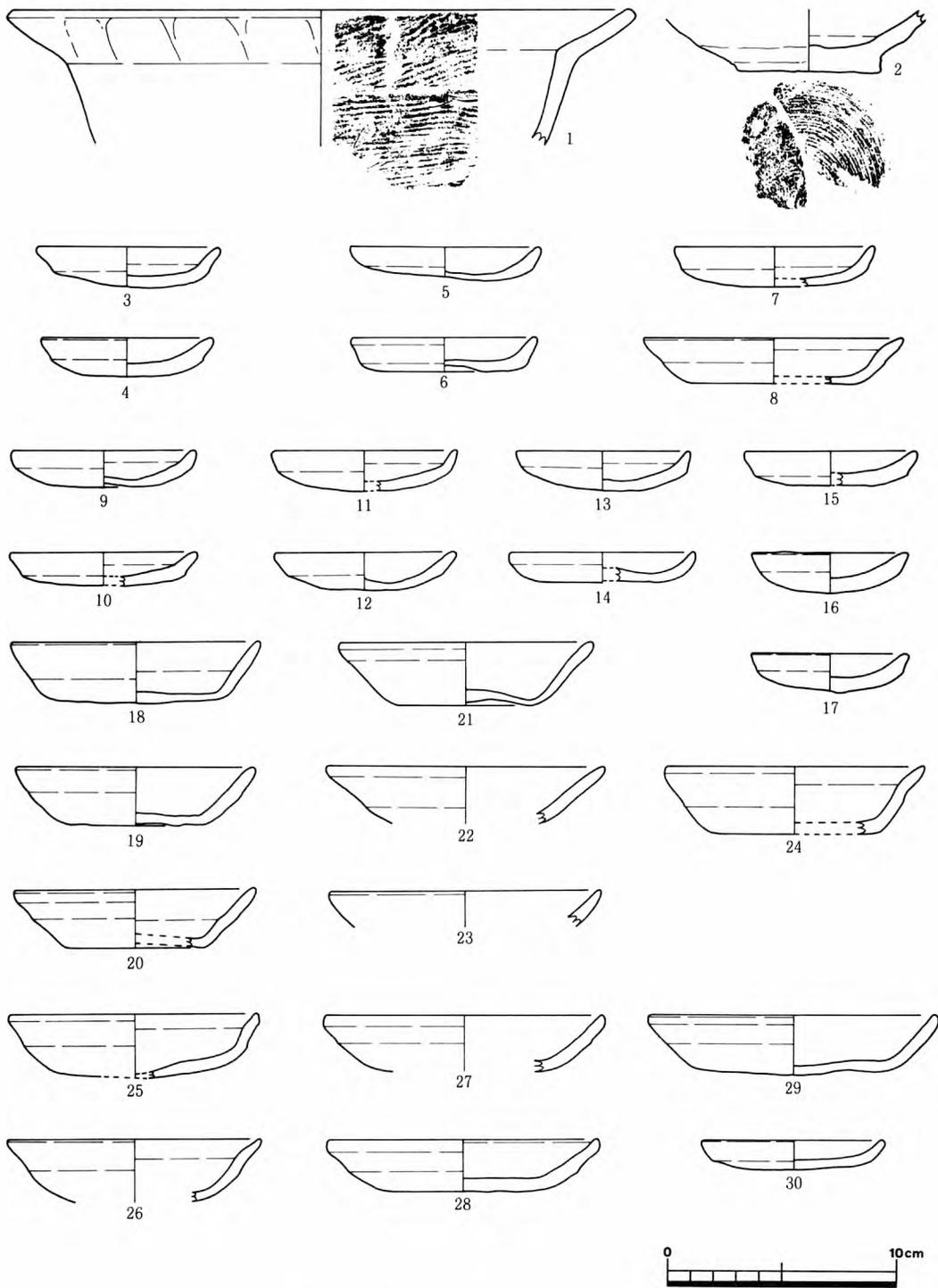
（3）中世土師器（第19～21図）

中世土師器の器種は、1の鍋形態の他は一部壙形態が認められるものの、皿形態がほとんどを占めている。出土遺構は、3～8は1号溝、25～30は2号溝、1・2・9～24は1・2号溝の合流後の出土である。32～66は5号溝、67～97は6号溝よりの出土である。

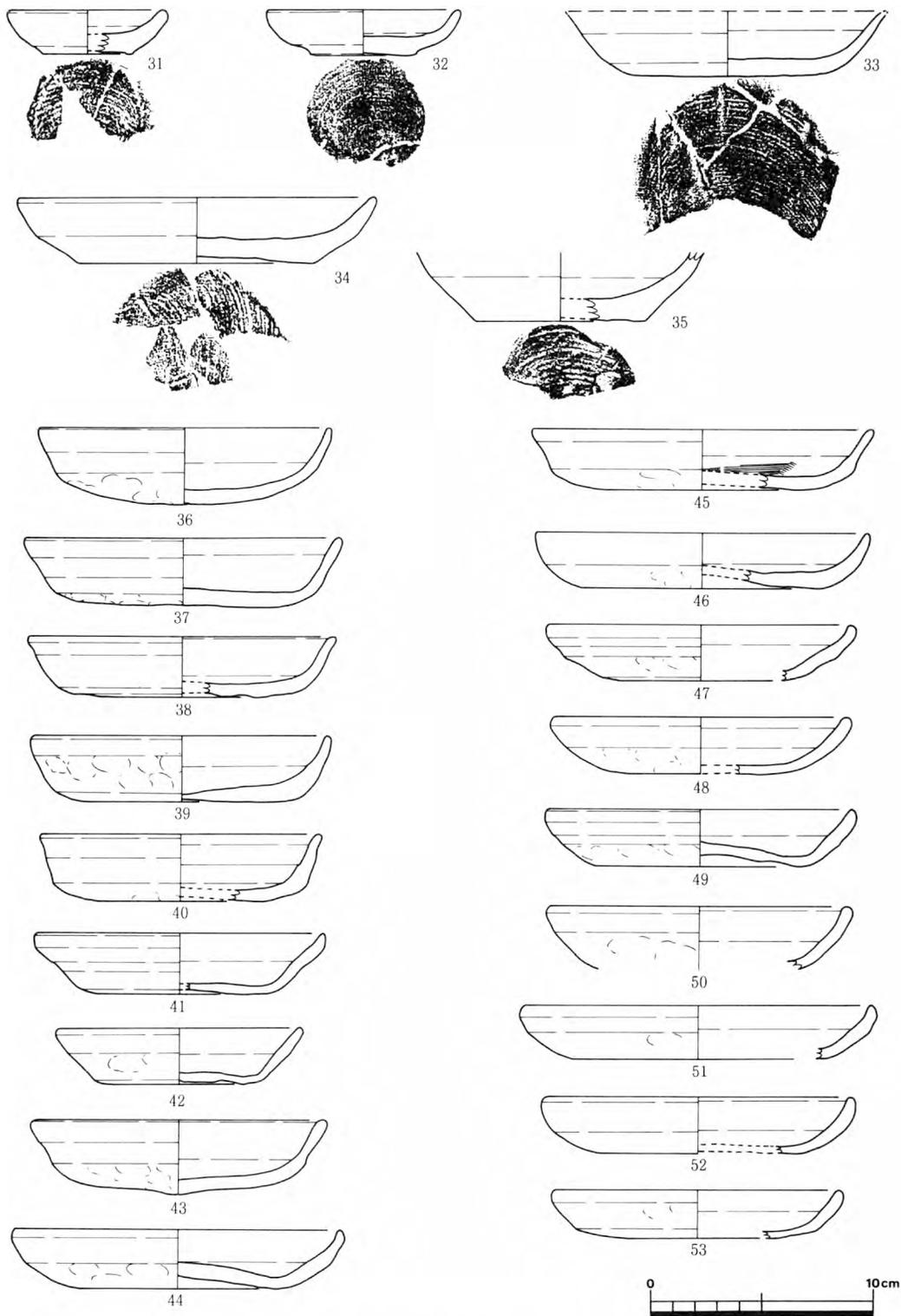
鍋・壙

1は口径27.0cmを測り、外面にはススが付着している。内面はヨコハケの痕跡が残っている。

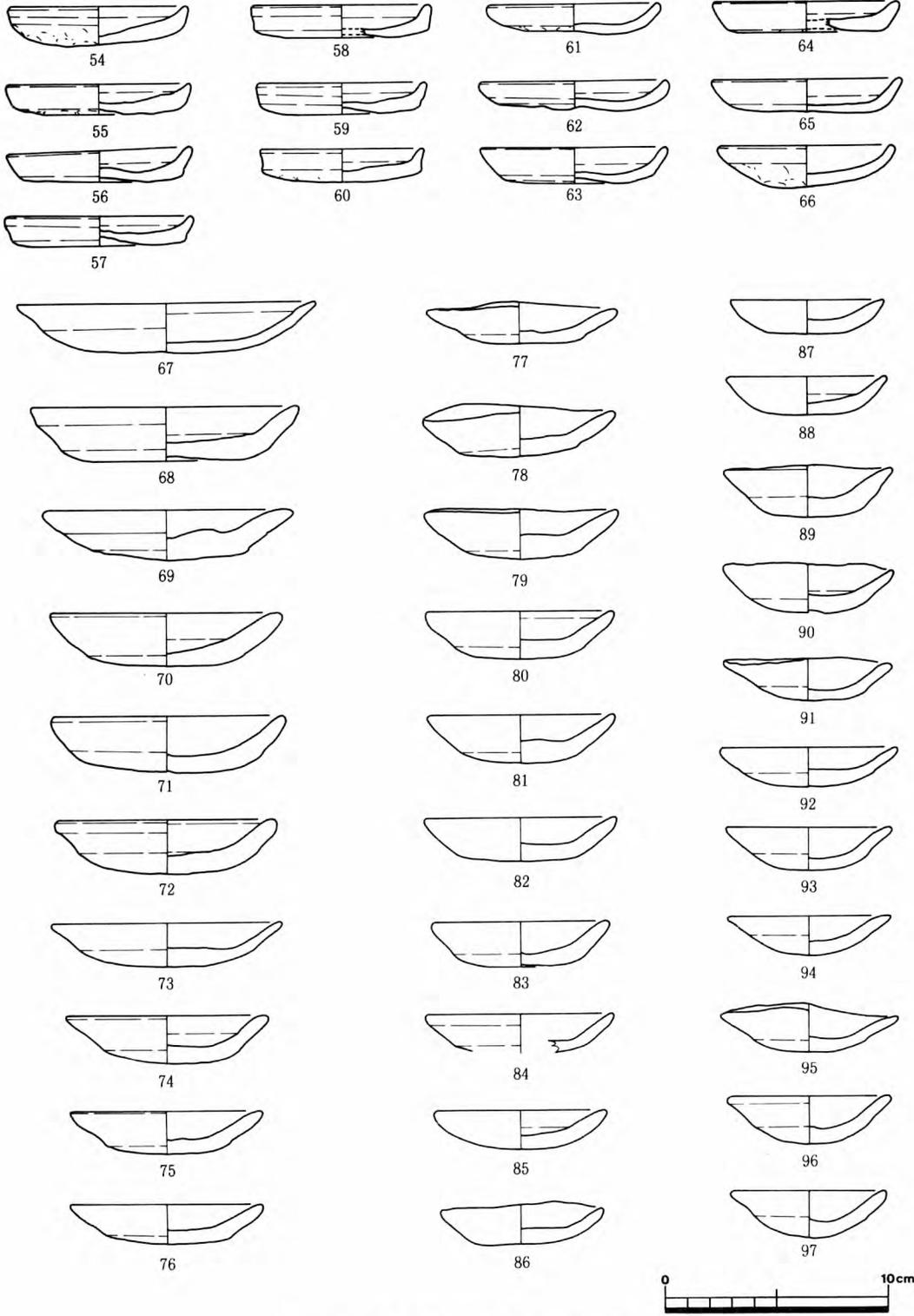
2は底径6.3cmを測る壙であり、底部は糸切り、内面は黒色である。



第19図 中世土師器実測図 (S = 1 / 3)



第20図 中世土師器実測図 (S = 1 / 3)



第21图 中世土師器実測図 (S = 1 / 3)

皿

中世土師皿は灯明皿も含めて使用期間がわずかであり、使用後廃棄されるものと考えられていて、一括性が高く遺構年代の決め手のひとつと言われている。本遺跡出土の土師皿を観察してみると1・2号溝、5号溝、6号溝はおのおの明らかな一括性のものと考えられるものが認められる。以下各溝出土の皿を略述してみたい。尚、中世土師皿の分類に関しては、藤田邦雄氏に教を請い、同氏の論考(1989.3)にしたがって記述する。

〈1・2号溝〉(第19図)

大きさが大小あり、大皿は11cm内外に、小皿は8cm内外にまとまっている。分類としては小皿はAタイプが多く認められ、Eタイプも存在している(4・16・17)。大皿はAタイプ(19・20・22?)、Cタイプ(25・27~29)、Eタイプ(8・18・21・24・26)が認められる。

なお、灯明皿として使用した痕跡のあるものは、4・8・16・17・26である。

これらの年代としては、大皿にはEタイプが認められ、またCタイプが存在していることより14世紀の前半頃の所産と考えたい。なお、小皿のうちEタイプの4・16・17はこれらより後出するものと考えられる。

ちなみに本溝より出土の中世土師器の破片数は1,847点であり、中世土師器総破片数の17.5%である。

〈5号溝〉(第20図・第21図)

ロクロ土師器と非ロクロ土師器が認められる。

31~35はロクロ土師器である。31は口径7.0cm、底径3.8cmを測り、器壁が厚く、口縁部がやや内湾みである。32は口径8.6cm、底径4.5cmを測り、器壁はやや薄く、口縁部の内湾傾向がはっきりしている。33・34は大皿で、口径がそれぞれ14.5cmと16.0cmを測り、33は薄手であり、34はやや厚手である。34は口縁部が内湾傾向を示している。

36~66は非ロクロ土師器である。大きさが大小あり、大皿(36~53)は10.9cm~15.6cmとハラエティーにとんでいるが、12~13cm大が多い。小皿は7~8cm大にまとまっている。分類としては大皿はCタイプ(41・44・48・49・51)、Dタイプ(38・40・43・45)とその他Aタイプが認められる。小皿(54~66)はDタイプが目立ち(54~60・63?・64)、その他Aタイプが認められる。

なお、灯明皿として明瞭に使用した痕跡のあるものはなかった。

これらの年代としては、ロクロ土師器が認められ、これが残るのは13世紀初め頃までといわれている。また、Dタイプは13世紀初頭から中頃までにかけて加賀地方での消費が予想されているものである。以上により5号溝出土のこれら中世土師器は、12世紀末から13世紀前半頃の所産と考えたい。

本溝より出土の中世土師器の破片数は2,067点であり、中世土師器総破片数の19.6%である。

〈6号溝〉（第21図）

大きさが大・中・小と認められ、大皿（67～69）は11.0cm～13.4cmで、中皿（70～73）は9.7cm～10.3cmで、小皿は6.8cm～8.8cmである。

67はこれらのなかでやや様相が異なるもので、口径13.4cm、器高2.2cmを測る。器壁は薄手であり、口縁部はやや外反している。この外反部分はヨコナデがていねいで、この境部分は稜ができています。内面の体部もていねいなヨコナデを行っている。内外とも口縁部以外は黒灰色を呈している。分類としてはFタイプで、おそらく京都系の土師器を模倣した在地産と考える。

68はややいびつであり、厚みは図より薄い部分も認められる。内面は体部から口縁部はヨコナデが顕著であり、外面は口縁部のヨコナデが二段になって施され、体部下半は稜が認められる。二段ナデはCタイプとしているが、これはやや異質であり、Aタイプの変形と考えられないだろうか。

その他はすべてAタイプである。口縁部をヨコナデにより外反させるため、体部下半の稜が認められる。底部は平底に近い丸底が存在しつつ、本来の意味での丸底も認められる。

なお、灯明皿として使用した痕跡のあるものは、75・76・77・79・89の5点である。

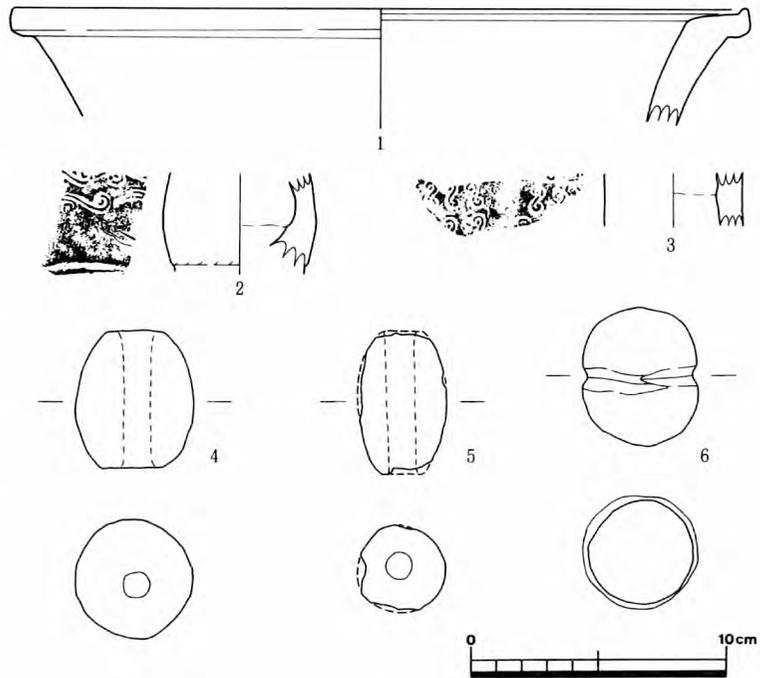
これらの年代としては、京都系模倣のFタイプが存在し、厚手で丸底のものが多く、それらはヨコナデによる稜が認められることより、15世紀後半から16世紀前半代の所産と考えている。

本溝より出土の中世土師器の破片数は1,026点であり、中世土師器総破片数の9.7%である。

（4）その他中世遺物等
（第22図）

1は口径28.6cmを測る瓦質土器の鍋と思われるもので、内外とも丁寧なへら(?)ミガキを施している。

2・3はやはり瓦質土器で仏花器の断片と考えられるものである。2は内面が黒色処理され、外面は逆S字状文様が横に押されている。3は内面がやや赤っぽくなっており、赤色処理を施されていたものと考えられる。外面にはやはり逆S字状



第22図 その他中世等遺物実測図（S = 1 / 3）

文様が縦に押されている。

4・5は土錘である。4は直径は4.65cm、長さ5.45cmを測るもので、重量は119gである。5はやや欠けているが、直径は3.45cm、残存長5.6cmを測り、重量は欠けているが59gである。

6は石錘である。直径4.56cm、長さ5.4cmを測り、ひもを掛けるきざみ目をいれている。重量は91.6gである。

(5) 石製品 (第23図・第24図)

1は硯である。形態は長方硯で、硯尻の右コーナー部分の破片である。脚は削りだしで下がすぼまっていて断面は逆台形状を呈している。また、硯頭にむかって徐々に脚高が低くなっているのが認められる。材質は赤色頁岩で山口県産赤間硯と見られ、時期は鎌倉時代のもと考えられる(垣内氏御教示)。1トレ包含層よりの出土である。

2は不明石製品である。側面は研いた感じであり光沢がでていて、断面は方形を呈している。材質は不明である。

3は石臼である。下臼であり、約1/4に欠けているが復元径30cmである。上面には摺った痕跡が弱く認められる。材質は粗粒砂岩で淡い緑灰色を呈している。6号溝よりの出土である。

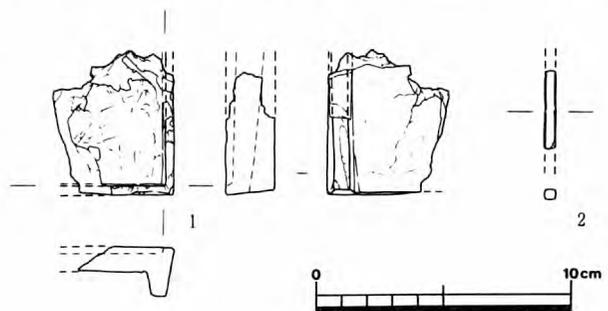
4は用途不明石製品である。やはり欠けているが、側面には粗いケズリ痕が残っている。中程にホゾ孔が穿たれている。これは中にはいるほど狭まっているものである。用途を推定する手がかりとして、上面(孔のある方を上面とした)には半分位にスス状のものが付着していて、下面にはそれがタール状になったものが付着している。このことより何か火に(火を)使う道具と考えられないだろうか。これは小松市の滝ヶ原石と考えられる。6号溝よりの出土である。

5は石臼であり、上臼である。やはり3/5ほど欠けているが、復元径35cmである。原料をのせる上面の凹の径は約25cmである。原料を流し込む孔は長方形を呈している。下面には摺った痕跡が認められるが、材質が粗いため刻み目がどうかは不明である。火山礫凝灰岩と考えている。

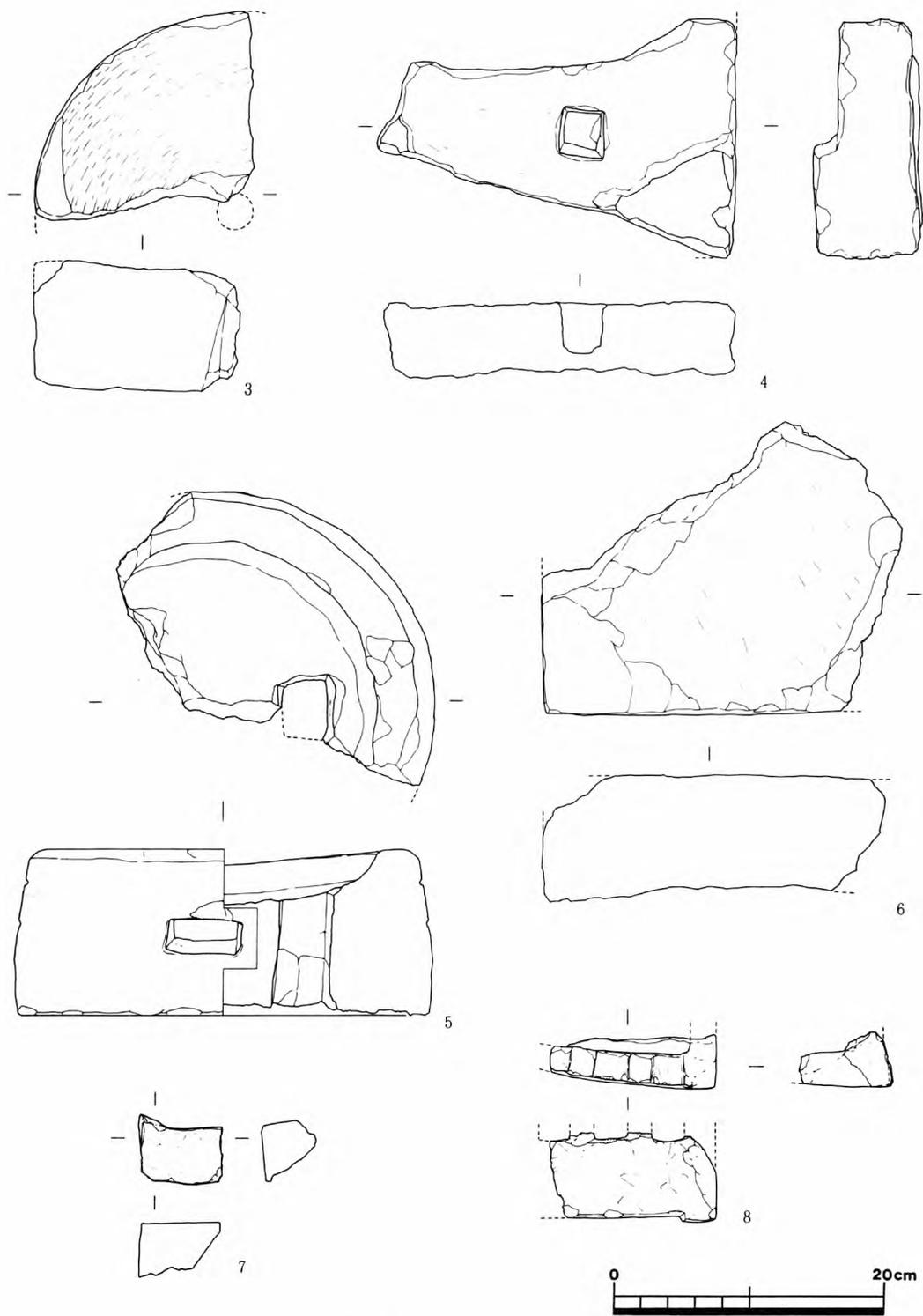
6は用途不明石製品であり、やはり欠けていてがほぼ方形のものであろうと考えている。側面及び上面は丁寧なケズリを行っている。下面は縁の部分は丁寧であるが、その他は粗くケズリの工具痕が残っている。凝灰岩である。

7は砥石片である。材質は不明である。

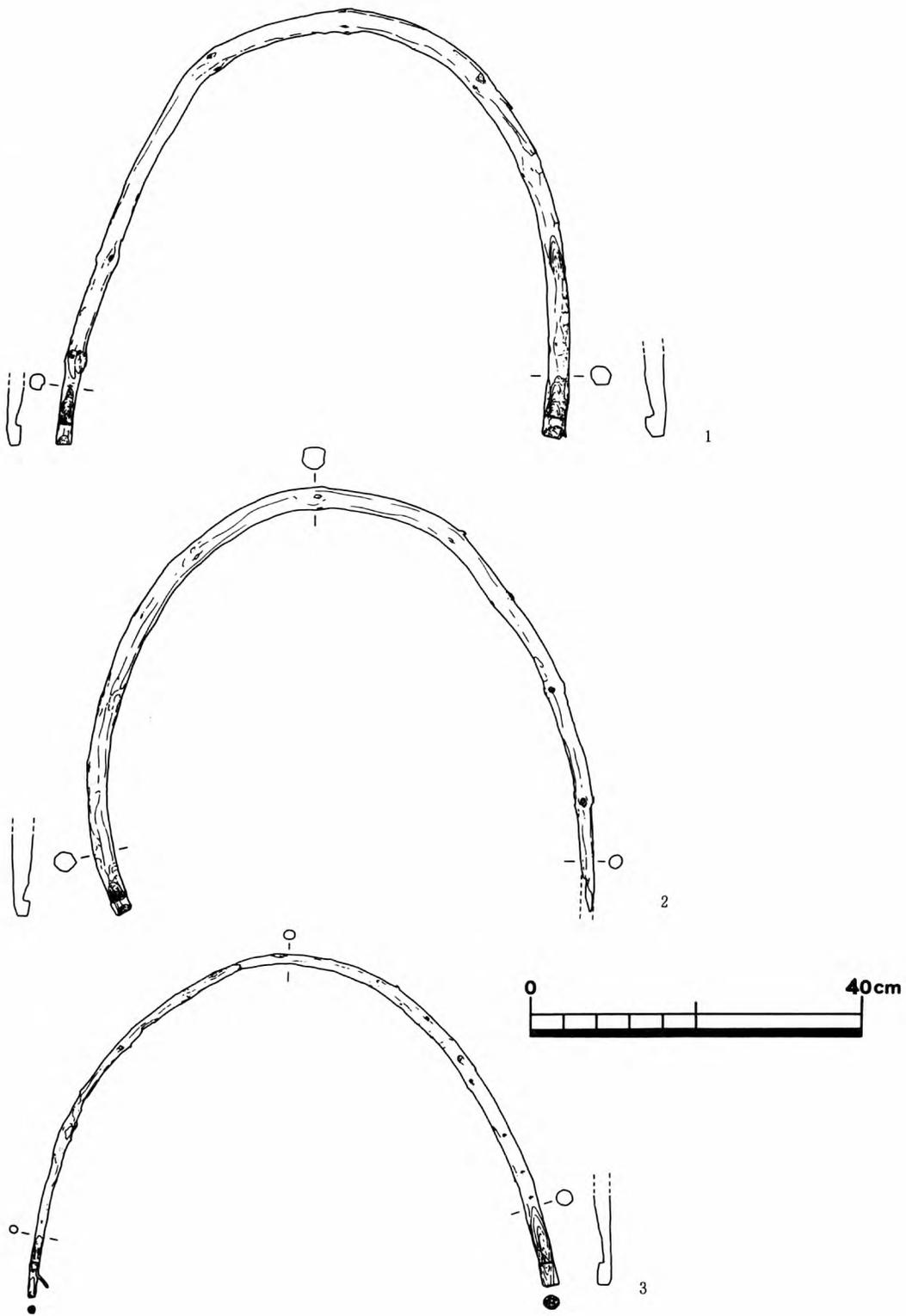
8は石製行火片である。D字型と言われるもので、右前部分しか残っていないが、窓は3個確認できる。石の産地は加賀市の水田丸産のもと考えられる緑色凝灰岩かそれに近いものと思われる。



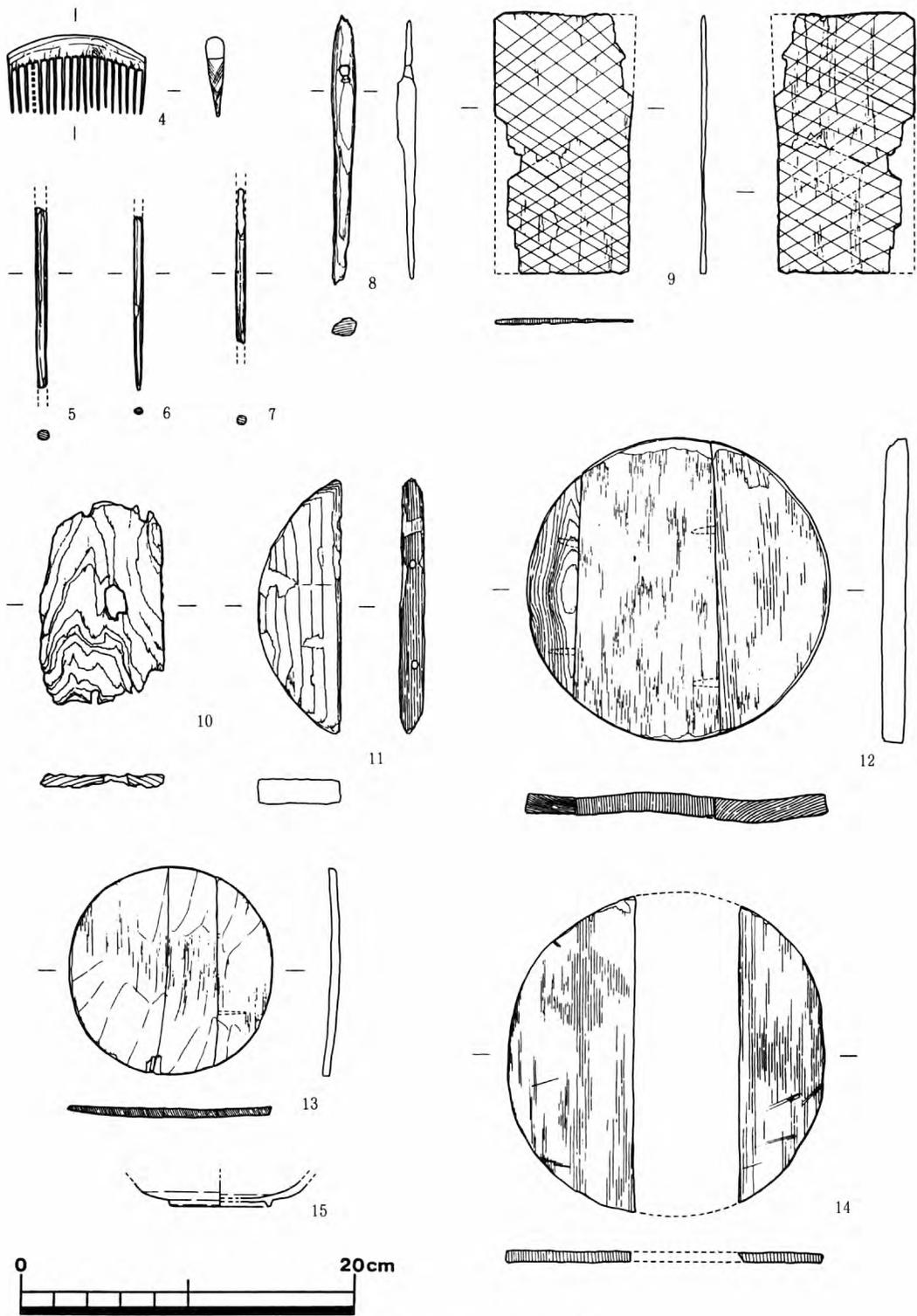
第23図 石製品実測図 (S = 1/3)



第24図 石製品実測図 (S = 1 / 5)



第25図 木製品実測図 (S = 1 / 8)



第26図 木製品実測図 (S = 1 / 4)

(6) 木製品 (第25図・第26図)

1～3は網か箕の枠と考えられるものである。いずれも杉の枝を折り曲げたもので、1・3は両端に、2は一端に(もう一端は欠けているため不明)切り込みを入れている。

4は櫛であり、刃が一本欠けているだけのほぼ完形品である。長さ8.3cm、幅4.7cm、最大厚み1.1cmを測る。

5～7は箸と考えられるもの。6はその先端部分が残っている。

8は残存長15.9cmを測るもので、不明木製品であるが、約0.6cm台形状の穿孔が認められることより、あるいは網を繕ったりするときの針と考えられるかもしれない。

9は両面に格子状の刻み目が施されているもので、長辺15.7cm、短辺8.3cm、厚さ0.35cmを測る。用途は不明であるが、曲物に使用したことも考えられなくもないが、折敷き等に使用したものと考えたい。

10は板状木製品片としたもので、残存した中央付近に穿孔が認められる。

11～14は曲物の底板である。14は割れていて接合はできなかったが、材質・木目・表面のキズ等により同一個体と考えられた。11・12・13の各部材には寄木接合するための木釘及びその孔が認められる。

(7) 鉄製品 (第27図)

1・2とも5号溝よりの出土で、槍かあるいは銚先と考えられるものである。1は全長12.4cm、最大幅2.5cm、最大厚2.0cmを測り、2は全長13.0cm、最大幅2.4cm、最大厚2.0cmを測る。

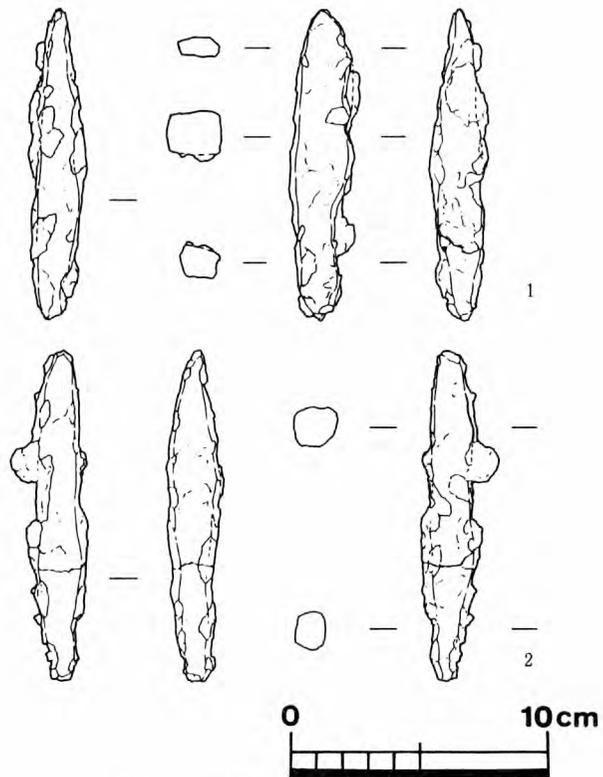
以上の木製品、鉄製品の時代は不明であるが、中世の溝等よりの出土であり、中世の遺物と考えている。

(8) まとめ

以上、中世遺物について記述してきたが、ここで若干のまとめをしたい。

前述のように中世土師皿は、比較的まとまって出土していて、遺構の年代を推定できるものである。

5号溝は、土師皿としてロクロ製品



第27図 鉄製品実測図 (S=1/3)

と非ロクロ製品が出土していて、その割合は後者が約2/3を占めている。このことよりロクロ製品が認められる最後に近い頃のもので、また、Dタイプの形態が認められ、このタイプの初現期に近いものと考えらる。その他、この溝に伴う遺物としては、第15図1の青磁碗、同4、同10の白磁碗、第17図21の珠洲鉢、同22の珠洲甕、同23・24の常滑片等があげられ、これらの消費期間を考えあわせて、5号溝は12世紀末から13世紀初め頃の溝と考えられる。

1・2号溝は残存状態は浅かったにもかかわらずまとまった遺物が出土している。土師皿は、やや小皿に新しく感じるものがまじっているが、その他は加賀地方では比較的出土例の少ない14世紀前半頃のものであり、この溝はこの時期のものと考えられる。この溝につくものと思われるその他の遺物は、第17図20の珠洲がこの溝の年代にあうもので、その他第15図2の青磁坏、第17図18の珠洲甕があげられる。

6号溝は土師皿として、京都系を模したFタイプがあり、その他のものも新しい要素のものが多く、この溝は15世紀後半から16世紀前半のころのものと考えられる。この溝に伴うものとしては、第16図11の越前甕があげられ、その他流れこみと考えられるものに同図1・3～5の加賀甕や8の越前甕があげられる。

以上、簡単にまとめてみたが、本遺跡の中世関係は溝が主体となっていて、銭畑遺跡としてはやや外れに近いものと考えられなくはないだろうか。

出土土器観察表 1

中世陶磁器

番号	器種	法量 (cm)	器面調整等	胎 土	色調・焼成	出土地点	備 考
15図 1	青磁碗	口径15.8	内面に草花文(蓮華文)		青みを帯びた緑色	5号溝	口縁1/4残存
"	"	口径10.0	外面に蓮弁又は花文の線刻		青緑色・黄灰緑色	2号溝中層	
"	"	口径6.4			青っぽい灰緑色	F-3グリッド包含層下層	
"	"		外面櫛状具による線刻 内面沈線・花文(ヘラ)		淡黄灰緑色	5号溝上層	
"	"				淡灰緑色	6号溝下層	
"	"		外面に蓮弁		くすんだ薄緑色	D・E-4・5グリッド	
"	"		内面に花文		緑灰色	5号溝	やや貫入あり
"	"	高台径 7.5	内面に線刻(ヘラ)		くすんだ薄緑色	1トレンチ地山	
"	"	高台径 6.2			青っぽい灰緑色	6号溝上層	
"	白磁碗				淡黄灰白色	5号溝下層	口縁部玉縁
"	"		内面に線刻		灰白色	1トレンチ土坑2中層	
16図 1	加賀甕	口径24.4	内外口縁部ヨコナデ・外頸部ヨコナデ内外指押え	0.5mm以下の白色粒・黒色粒やや含む 比較的緻密	内外白灰色・良好	6号溝	
"	"		外ヨコナデ	0.5mm以下の白色粒・黒色粒若干含む 緻密	内外褐色、内一部緑灰色・良好	2トレンチ土坑4中層	
"	"		内外口縁部ヨコナデ	1mm大の石英粒若干部組む 0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	内外灰色・良好	6号溝	
"	"		内外口縁部ヨコナデ	微砂粒含む	内外濃灰色・良好	6号溝	
"	"		内外口縁部ヨコナデ	1~3mm大の小石・礫粒やや含む、微砂粒含む	外褐色 内濃褐色・良好	6号溝上層	
"	不明甕or壺	底径15.2	外ヨコナデ・外一部ケズリの後ヨコナデ・内横位のハケ目	1mm大の白色砂粒やや含む 微砂粒含む	外淡黒灰色 内淡灰色・良好	5号溝	
"	加賀鉢		内外口縁部ヨコナデ	1~2mm大の石英粒やや含む 微砂粒含む 比較的緻密	外淡褐色 内黄褐色・良好	6号溝上層	口縁部端に凹線がめぐる
"	越前甕			0.5mm大の砂粒含む、微砂粒含む、7mm大の小石1個含む	内外黄灰褐色 ・やや不良	6号溝	
"	"		内外口縁部ヨコナデ	0.5mm位の石英粒含む、微砂粒含む	内外黄灰褐色 ・やや不良	D-2・3グリッド	
"	"		内外口縁部ヨコナデ	0.5~1mm大の石英粒・砂粒やや含む、微砂粒含む	外淡灰褐色 内口縁部灰色・黒灰色・良好	F-3グリッド包含層	
"	"		内外口縁部ヨコナデ 内指頭によるナデ痕	0.5~1mm大の石英粒・砂粒やや含む、微砂粒含む	内外淡灰色 ・良好	6号溝	
"	"	口径10.5	内外口縁部ヨコナデ	1mm位の石英粒・砂粒若干含む、微砂粒やや含む	外灰白色・一部黄緑色、内褐色・白灰色・良好	6号溝	外指頭押えで角を付けている

出土土器観察表 2

中世陶磁器

番号	器種	法量 (cm)	器面調整等	胎 土	色調・焼成	出土地点	備 考
16図	越前壺	底径8.5	外体部下端付近ヘラケズリ	0.5~1mm大の石英粒やや含む、微砂粒含む	外淡褐色、内褐色・良好	2号溝下層	
14	甕			1~2mm大の小石・石英粒やや多く含む、微砂粒含む	内外黒褐色、外は釉・良好	1トレンチ土坑3上層	押印あり
15	甕			1~2mm大の小石・石英粒やや含む、微砂粒含む	外赤灰褐色、内灰褐色・やや良	6号溝下層	押印あり
16	甕			0.5~1mm大の石英粒・砂粒やや含む、微砂粒含む	内外淡黄褐色・やや不良	1トレンチ土坑3上層	押印「本」
17図	鉢			0.5~1mm大の石英粒・砂粒やや含む、微砂粒含む	内外灰褐色・やや良好	1・2号溝	片口・おろし目14条1単位
18	珠洲壺	底径11.5	内外ヨコナデ顯著 静止糸切痕あり	白色砂粒・黒色粒やや含む 海綿状骨針若干 緻密	外黄灰色、内淡黒灰色・良好	2号溝	
19	壺			微砂粒やや含む	内外灰色・良好	F-2グリッド包含層	
20	鉢		内外口縁部ヨコナデ	微砂粒含む 海綿状骨針若干	内外黄白灰色・やや不良	1・2号溝下層	片口・おろし目あり
21	甕	口径19.5 底径9.5 器高7.8	内外ヨコナデ 静止糸切痕あり	1~2mm大の小石・石英粒若干含む、微砂粒やや含む 緻密	内外濃黒灰色 内面磨耗のため 灰色強い・良好	5号溝	片口
22	甕	口径41.0	内外口縁部ヨコナデ	微砂粒含む	外淡黒灰色、内黒灰色・良好	5号溝(6号溝)	
23	常滑甕			0.3mm位の石英粒若干含む 微砂粒やや含む 緻密	外濃黒灰色、内淡灰褐色・良好	5号溝	押印あり
24	甕			0.5mm位の石英粒若干含む 微砂粒含む 緻密	外淡灰色、内やや濃灰色・良好	5号溝	押印あり
25	不明甕			微砂粒やや含む 緻密	外褐色 内灰褐色・良好	1トレンチ包含層	押印あり
26	常滑	口径43.0	内外口縁部ヨコナデ	1~2mm大の砂粒若干含む 微砂粒やや多く含む	外灰色、内淡灰褐色・良好	1・2号溝	焼き歪みあり
27	瀬戸雑茶碗	口径11.0 ~12.0口径			内外褐色、一部淡灰褐色・良好	6号溝上層	
28	皿	底径12.0	糸切		内外黄緑色、外底橙灰色・良好	D-E-4・5グリッド	
29	香炉				内外褐色・黄白色・良好	F-4グリッド包含層	
30	甕				外褐色・黒褐色 内黄白色・良好	D-4グリッド包含層	

その他の中世遺物(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	器面調整等	胎 土	色調・焼成	出土地点	備 考
22図	瓦器						
1	鍋	口径28.6	内外とも丁寧なヘラ(?) ミガキ	微砂粒やや含む 微小雲母含む	内外黄赤褐色、 外一部黒褐色・良好	6号溝	
2	花器			比較的緻密	外黄白灰色 内黒色・良好	〃	外面S字状文
3	甕			〃	外黒灰色、内淡赤灰色・良好	〃	〃
4	土錘	全長5.45 直径4.65			淡橙灰色 ・良好	D-2グリッド	119g
5	土錘	全長5.6 直径3.45			淡黄灰色 ・良好	D-3グリッド包含層	59g(残存)

出土土器観察表 3

中世土器

番号	器種	法量(cm)	色調・焼成	出土地点	備考	番号	器種	法量(cm)	色調・焼成	出土地点	備考
19図 1	鍋	口径27.0	外黒灰色、内 黄灰色・良好	2号溝	内面ヨコ ハケ目	19図 26	皿	口径11.2	淡橙褐色 ・やや良好	2号溝中層 1・2号溝下層	油煙痕
"	2	底径6.3	外赤灰色、内 黒灰色・良好	1・2号溝上層、 中層	糸切	"	"	口径12.4	淡赤灰色 ・やや良好	2号溝下層	
"	3	口径8.0 器高1.8	赤灰色 ・良好	1号溝	いびつ	"	"	口径12.0 器高2.3	灰色 ・良好	"	
"	4	口径7.6 器高1.7	淡赤灰色 ・やや良好	"	油煙痕	"	"	口径12.8 器高2.7	淡赤灰色 ・良好	"	
"	5	口径8.2 器高1.4	淡赤灰色 ・良好	"		"	"	口径8.1 器高1.3	淡赤灰色 ・良好	"	
"	6	口径8.0 器高1.5	淡橙灰色・濃 灰白色・良好	" 下層		20図 31	"	口径7.0 器高2.0	淡赤灰色 ・やや良好	5号溝下層	糸切
"	7	口径8.1 器高1.8	灰白色 ・良好	" "		"	"	口径8.6 器高2.1	橙褐色 ・やや良好	" "	"
"	8	口径11.4 器高2.0	淡灰白色 ・やや良好	" "	油煙痕	"	"	口径14.5 器高2.95	橙褐色 ・やや不良	" 上層	"
"	9	口径7.8 器高1.7	淡赤灰色 ・良好	1・2号溝		"	"	口径16.0 器高3.0	橙赤褐色 ・不良	" 上層 下層	"
"	10	口径8.0 器高1.4	淡赤灰色 ・良好	"		"	"	底径7.6	灰褐色 ・やや良好	"	
"	11	口径8.0 器高1.8	淡赤灰色 ・良好	"		"	"	口径13.1 器高3.5	白褐色 ・やや不良	5号溝上層他	
"	12	口径7.8 器高1.7	黄灰白色・淡 赤灰色・良好	"		"	"	口径14.0 器高3.2	淡灰褐色 ・やや良好	" 上層	
"	13	口径7.5 器高1.7	灰白色 ・良好	" 下層		"	"	口径13.8 器高2.8	淡黄褐色 ・不良	"	
"	14	口径8.0 器高1.3	淡灰褐色 ・良好	"		"	"	口径13.2 器高3.0	淡褐色 ・やや良好	" 上層	
"	15	口径7.4 器高1.6	淡橙灰色・淡 赤灰色・良好	" 中層		"	"	口径12.6 器高3.1	淡赤褐色 ・やや不良	" "	
"	16	口径6.9 器高1.8	淡赤灰色 ・やや良好	"	油煙痕	"	"	口径12.9 器高2.8	橙褐色 ・やや不良	"	
"	17	口径6.9 器高1.7	淡赤灰色 ・やや良好	"	"	"	"	口径10.9 器高3.6	"	" 上層	
"	18	口径11.0 器高2.7	淡赤灰色 ・やや良好	" 下層		"	"	口径12.8 器高3.4	" ・良好	" 下層他	
"	19	口径10.6 器高2.6	淡灰白色 ・良好	" 中層 下層		"	"	口径14.6 器高2.75	淡灰褐色 ・やや不良	" "	
"	20	口径10.6 器高2.6	淡赤灰色 ・良好	" 中層		"	"	口径15.4 器高2.75	淡褐色 ・やや良好	" 上層他	内面ハケ 目
"	21	口径11.2 器高2.8	灰白色 ・良好	" 上層 中層		"	"	口径14.9 器高2.5	白褐色 ・やや不良	"	
"	22	口径12.2	淡赤灰色 ・やや良好	" 上層		"	"	口径13.7 器高2.6	淡灰褐色 ・やや不良	"	
"	23	口径12.0	淡灰白色 ・良好	" 上層		"	"	口径13.1 器高2.6	"	"	
"	24	口径11.4 器高3.0	淡灰白色 ・やや良好	" 上層 中層・下層		"	"	口径13.6 器高2.6	"	" 下層他	
"	25	口径11.1 器高2.9	淡赤灰色 ・良好	2号溝		"	"	口径13.4	淡赤灰白色 ・不良	"	

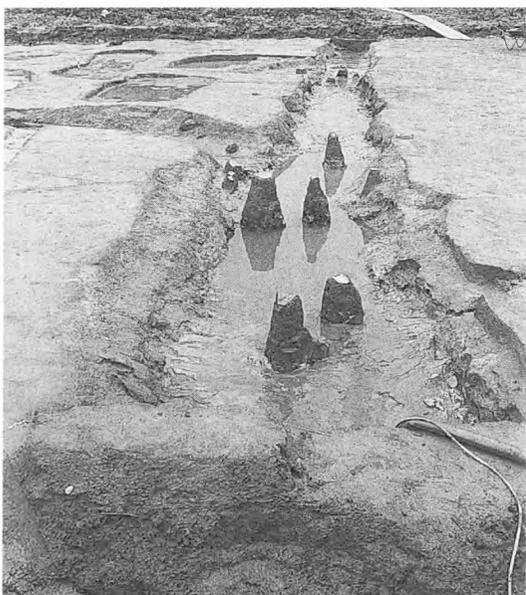
出土土器観察表 4

中世土師器

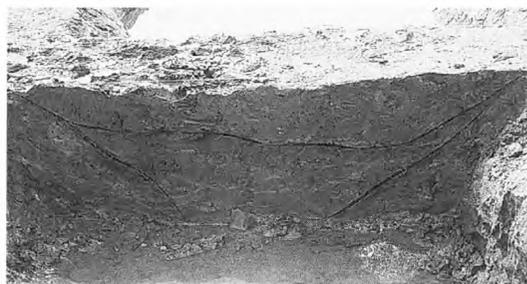
番号	器種	法量(cm)	色調・焼成	出土地点	備考	番号	器種	法量(cm)	色調・焼成	出土地点	備考
20図	皿	口径15.6 器高2.5	淡赤灰色 ・不良	5号溝		21図	皿	口径8.5 器高1.9	淡黄灰褐色 ・良好	6号溝	油煙痕
51						76					
52	”	口径13.6 器高2.6	淡赤褐色 ・不良	”		77	”	口径8.2 器高1.9	灰白色 ・良好	”	” いびつ
53	”	口径12.7 器高2.2	淡赤灰白色 ・不良	”		78	”	口径8.4 器高2.1	灰白色 ・良好	”	いびつ
21図	”	口径7.9 器高1.8	淡赤褐色 ・やや不良	” 下層他		79	”	口径8.4 器高2.2	やや濃灰白色 ・良好	”	油煙痕
54	”					80	”	口径8.4 器高2.2	橙灰色 ・良好	”	
55	”	口径8.2 器高1.4	淡灰褐色 ・やや不良	”		81	”	口径8.4 器高2.2	淡黄灰白色 ・良好	”	
56	”	口径8.2 器高1.5	淡赤褐色 ・やや不良	”		82	”	口径8.4 器高2.0	灰白色 ・良好	”	
57	”	口径8.1 器高1.3	淡褐色 ・やや不良	”		83	”	口径7.8 器高2.0	淡灰白色 ・良好	”	
58	”	口径7.9 器高1.5	淡赤褐色 ・やや不良	”		84	”	口径8.3	橙灰色 ・良好	”	
59	”	口径7.5 器高1.4	淡赤褐色 ・やや不良	”		85	”	口径7.6 器高1.8	淡赤橙灰色 ・良好	” 上層	
60	”	口径7.3 器高1.5	淡褐色 ・不良	”		86	”	口径7.1 器高1.8	やや橙灰色 ・良好	” ”	
61	”	口径7.6 器高1.4	淡赤褐色 ・やや不良	” 上層		87	”	口径6.8 器高1.8	” ・良好	”	
62	”	口径8.2 器高1.4	淡褐色 ・やや不良	”		88	”	口径7.0 器高1.7	淡赤橙灰色 ・良好	”	
63	”	口径8.3 器高1.65	淡赤褐色 ・やや不良	”		89	”	口径7.4 器高2.2	” ・良好	”	油煙痕
64	”	口径8.2 器高1.4	淡赤褐色 ・やや不良	”		90	”	口径7.5 器高2.2	橙灰色 ・良好	”	
65	”	口径8.3 器高1.5	淡赤褐色 ・不良	”		91	”	口径7.3 器高1.9	” ・良好	” 上層	
66	”	口径7.8 器高1.95	淡褐色 ・やや不良	”		92	”	口径7.8 器高1.8	灰白色 ・良好	”	
67	”	口径13.4 器高2.2	黒灰色・濃灰 白色・良好	6号溝下層		93	”	口径7.3 器高1.9	灰白色 ・良好	”	
68	”	口径11.9 器高2.4	橙灰色 ・良好	”		94	”	口径7.1 器高1.8	灰白色 ・良好	” 上層	
69	”	口径11.0 器高2.3	灰白色 ・良好	”		95	”	口径7.6 器高1.9	灰白色 ・良好	”	いびつ
70	”	口径10.0 器高2.4	橙灰色 ・良好	”		96	”	口径7.1 器高2.2	橙灰色 ・良好	” 上層 下層他	
71	”	口径10.3 器高2.6	黄灰白色 ・良好	”		97	”	口径6.9 器高2.1	橙灰色 ・良好	”	
72	”	口径9.7 器高2.5	橙灰色 ・良好	”							
73	”	口径10.0 器高2.0	淡橙灰色 ・良好	” 上層							
74	”	口径 8.8 器高2.2	橙灰色 ・良好	”							
75	”	口径8.4 器高1.9	濃黒灰色 ・良好	”	油煙痕						



1・2号溝セクション
ベルト全景（東→西）



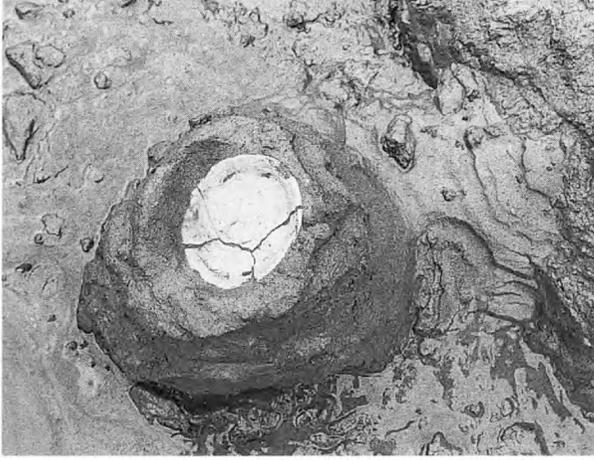
1号溝全景（東→西）



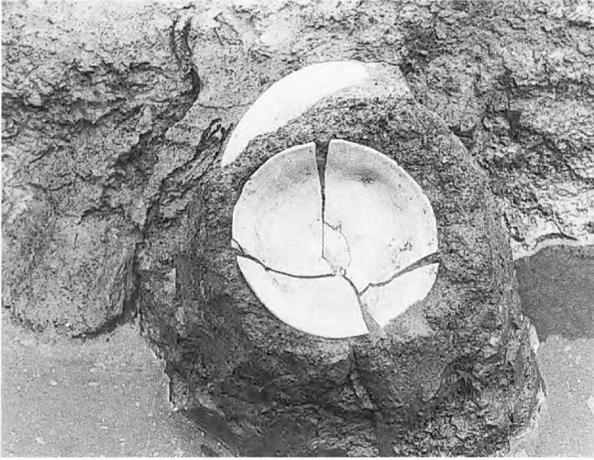
1・2号溝セクション（上段1号溝・下段2号溝）

2号溝全景（南→北）

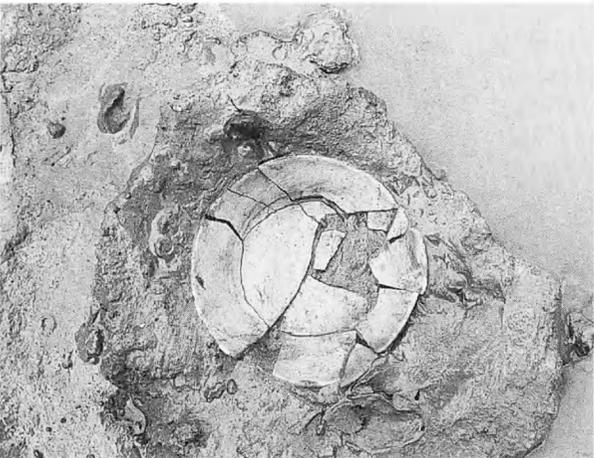




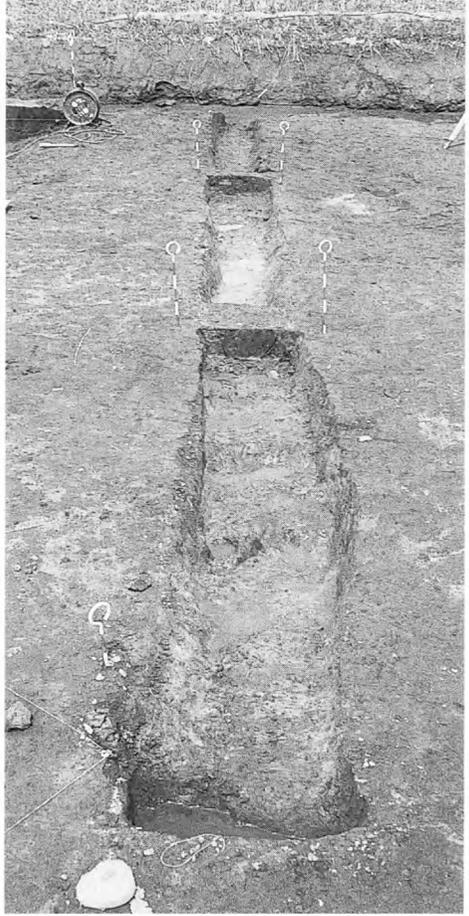
1号溝出土土師器



2号溝出土土師器



◀ 2号溝出土土師器



4号溝全景(東→西)



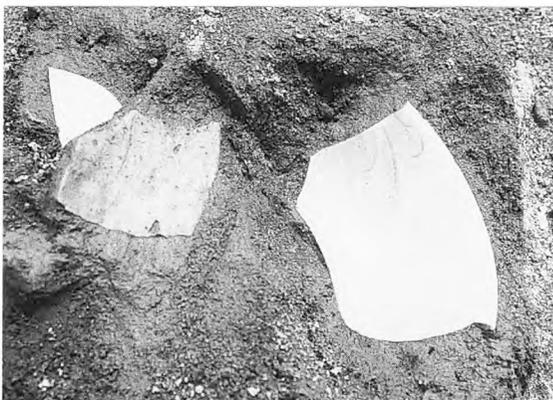
▲ 1・2号溝北西側包含層出土漆器



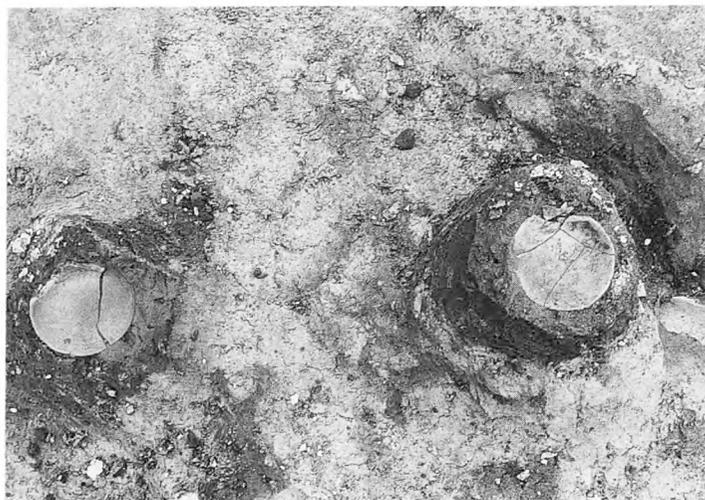
5号溝全景(東→西)



5号溝出土鉄製品



5号溝出土青磁碗



5号溝出土土師器





6号溝セクションベルト全景(東→西)



6号溝全景(東→西)



6号溝セクション



6号溝出土土師器



6号溝出土土師器



6号溝出土石錘



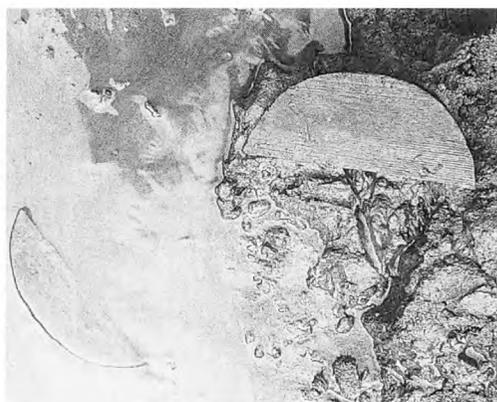
6号溝出土木柱



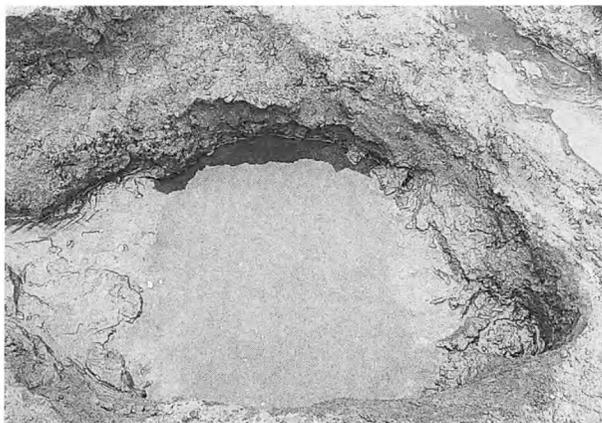
6号溝出土曲物側板



6号溝出土板状木製品



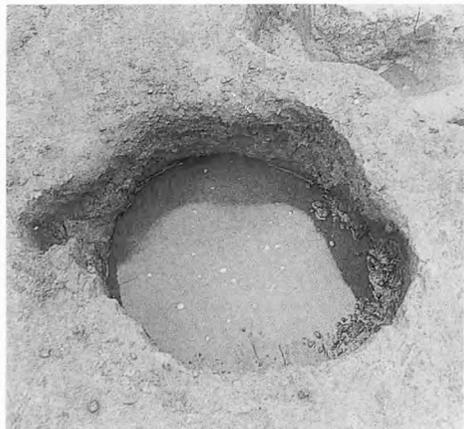
6号溝出土曲物底板



▲
2号土坑全景



2号土坑出土状態▶



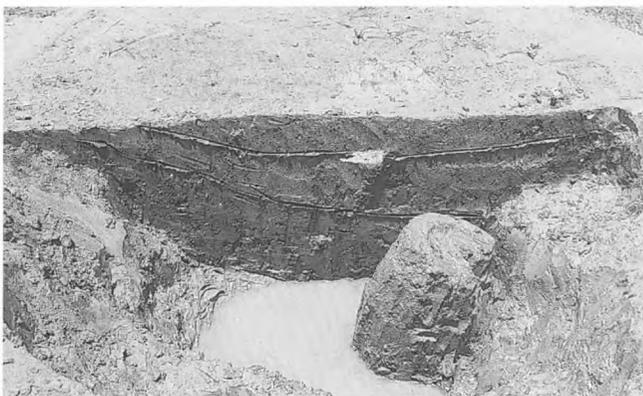
3号土坑全景



5号土坑全景



4号土坑全景



5号土坑セクション



7号土坑全景



6号土坑全景



第Iトレンチ (東→西)



11号土坑全景



第IIトレンチ (南→北)



10号土坑出土状態



12号土坑出土状態



発掘調査風景（6号溝）

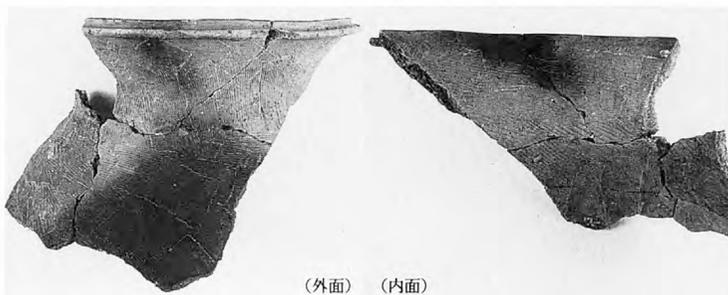


発掘調査作業員

発掘調査参加者：飯田 安吉・岡田 一男・河南 時雄・北風 利義・重吉 信雄・竹田 藤光・長清 幸治・林 真輝
亦 幸市・米田 清忠・若山佐一郎・河南 敏子・広島キヨ子・森野 絹枝



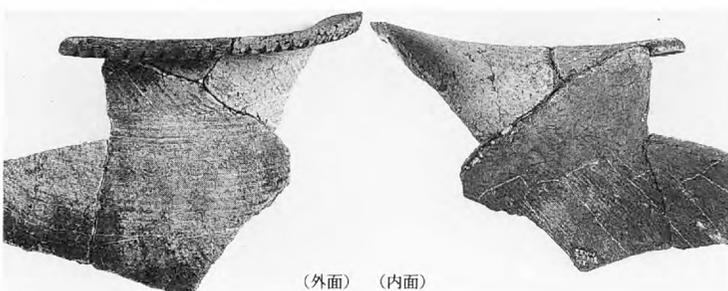
8-5 甕C類



(外面) (内面)
8-1 壺



8-5 (外面)



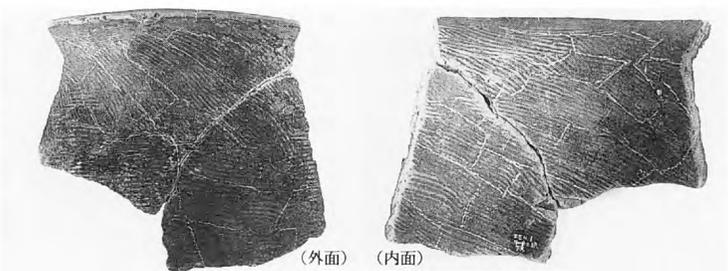
(外面) (内面)
8-2 甕B類



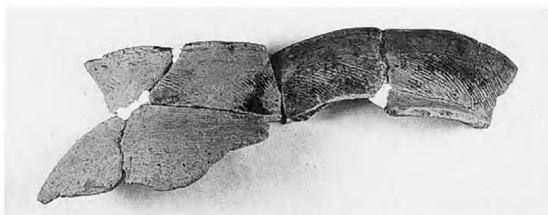
(外面) (内面)
8-3 甕B類



8-5 (内面)



(外面) (内面)
8-4 甕A類



8-6 甕C類

〈2号土坑出土弥生土器〉



(外面)

(外底)

(内底)

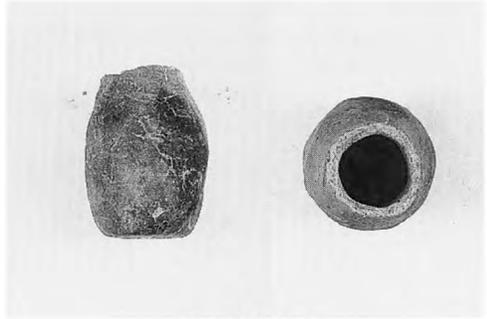
8-8 甕底部



8-10 刺突文をもつ甕



9-11 高坏

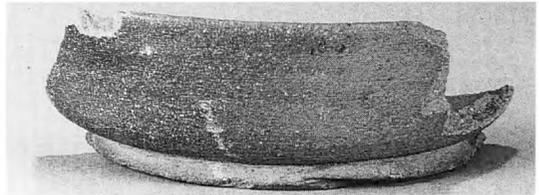


9-14 小型土器

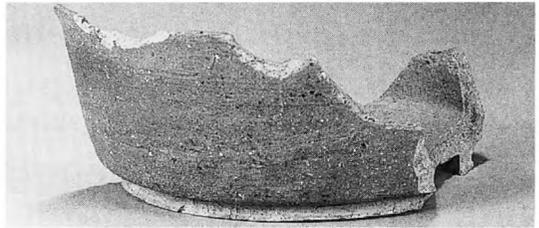
〈2号土坑出土弥生土器〉



11-1 坏B蓋Ⅱ類



11-2 坏B身Ⅱ類



11-3 坏B身Ⅰ類

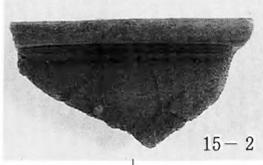


11-4 小型甕

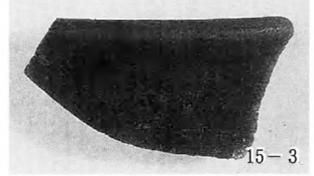
〈12号土坑出土土器〉



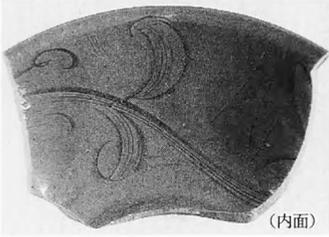
15-1



15-2



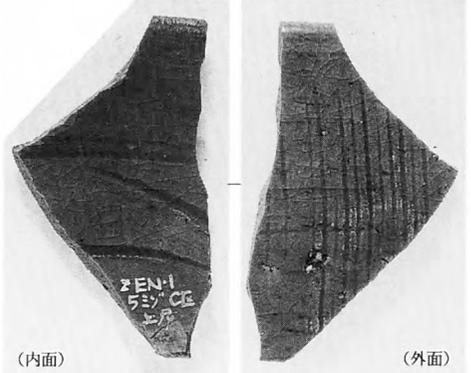
15-3



(内面)



(内面)



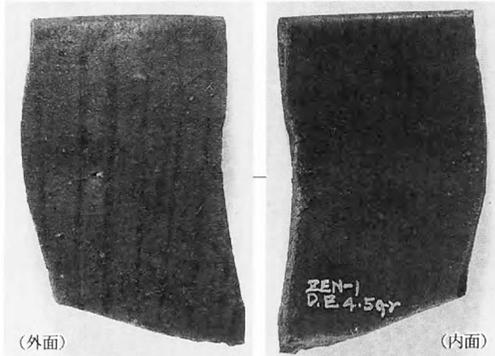
(内面)

(外面)

15-4



15-5



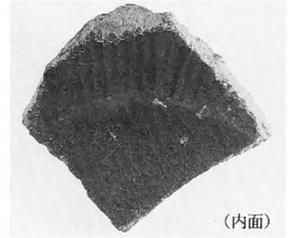
(外面)

(内面)

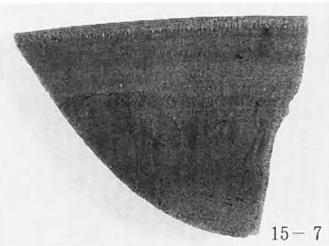
15-6



15-8



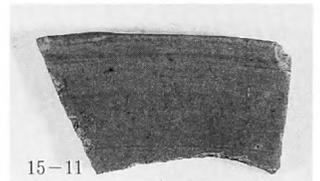
(内面)



15-7



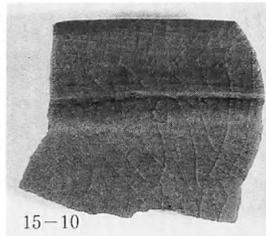
15-9



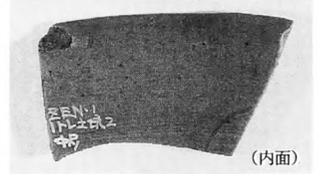
15-11



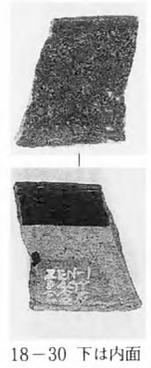
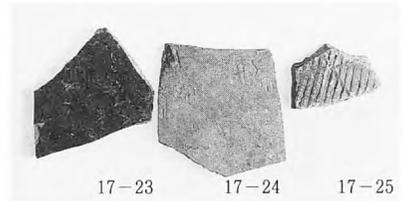
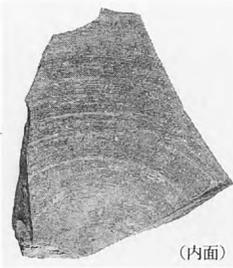
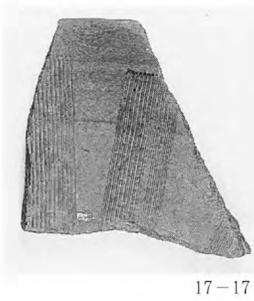
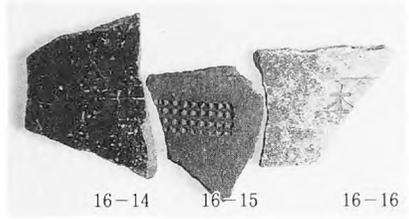
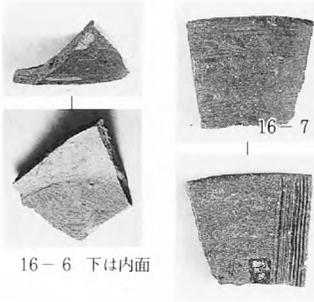
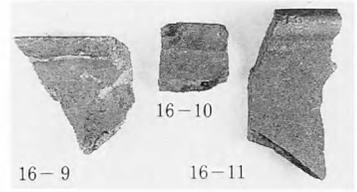
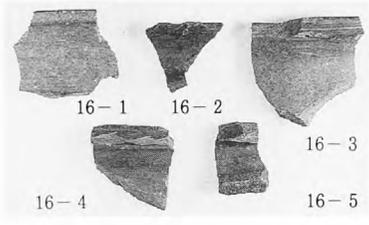
(内面)



15-10

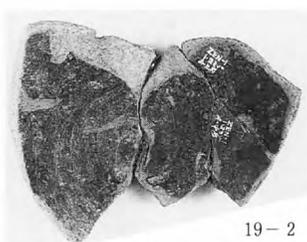


(内面)





19-1



19-2



(内面)



(外底)



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



19-16



19-24



19-8



19-17



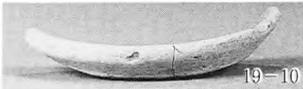
19-25



19-9



19-18



19-10



19-19



19-26



19-11



19-20



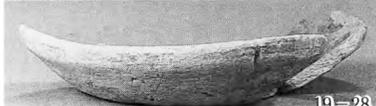
19-27



19-12



19-21



19-28



19-13



19-22



19-29



19-14



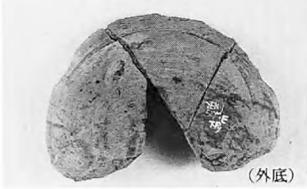
19-23

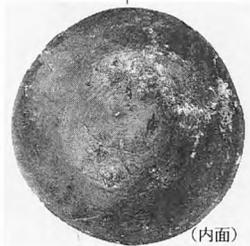
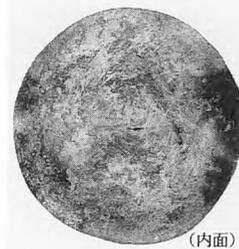
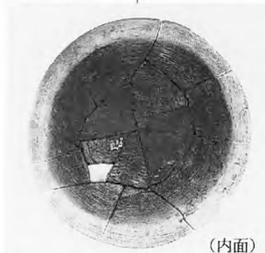


19-30



19-15







21-79



21-84



21-90



(内面)



21-85



21-91



21-86



21-92



21-80



21-87



21-93



21-81



21-88



21-94



21-82



21-89



21-95



21-83



(内面)



21-96



21-97



22-1



21-2

22-3



(内面)



22-4

22-5

22-6

銭畑遺跡 I 発掘調査報告書

平成 4 年 3 月 19日 印刷
平成 4 年 3 月 31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会

石川県小松市子馬出町91番地
〒923 電話0761 (22) 4111

印刷 マルト印刷工業株式会社
